

己がの本さ性がになる

教育相談、カウンセリングの実践を経て

安江 昊太郎

まえがき

旅路の中、ある家に一泊して翌朝旅立とうとする芭蕉の前に、その家の夫婦が赤子を差し出して、

「この子に、何かお言葉を」

芭蕉は赤子を凝視し、

「汝の本性さがになれ」

この話を聞いたのは、私が二十代前半の時だった。瞬間に私の人生の方向が決まった。

教育相談やカウンセリングという仕事は、相談員がクライアントとかわっていく中で「その人自身の本性になる」ことを手伝う仕事である。

だが、クライアントが「その人自身の本性になる」ように手伝う過程で、相談員自身も「己の本性」になっていかねば、できることではない。

かかわり、というのは相互作用を意味する。

クライアントも相談員も、そのかかわり合いの過程で、共に「己自身の本性」になっていくのである。

私の教育相談のやり方は、私自身の本性から発した、私独自のものである。

私の体験談が、読者自身の本性に基づくやり方を見つける契機になればと思い、また、そうなることを願って、世間の目に晒すことにした。

そして、教育相談やカウンセリングに限らず、人生を生きる上での参考になれば、とも願う。

もくじ

己を語る——私の戦争体験	6
真夜中の家庭訪問	23
食べられない少女とその母親	39
進路相談 その一	57
進路相談 その二	60
放課後の算数	63
ジャズレコードをくれた青年	67

縁側で独りジャムパンをかじる男児	79
酒びん持参の家庭訪問	86
登校できなくなった四年生	90
扉を開いてもらう	94
体で聴く	109
「家まで送ろうか？」	120
プラレールで遊ぶ少年	127
己の本性になる	135
嵩キモノ吾ヲ啓ケヨ	159
あとがき	161
著者略歴	166

己を語る——私の戦争体験

高校三年の男子が二学期になっても登校せず、残暑のきびしい昼日中、頭から布団をかぶって寝ていて親にも顔を見せない、という相談が、父親からあった。

私は、さっそく父親と共に、その家に行った。

子どもの部屋に入ると、まだ暑い昼中、頭から布団をかぶって顔を見せずに横になっている息子が居た。

起きて先生に挨拶するようにと言う父親を制して、私は、寝たままの息子の傍に座り、自己紹介をした。

職業、氏名に続いて、私の中学、高校時代の物語りを始めた。

*

昭和十九年、私は中学二年の一学期が終わると、山梨県の中学校に転校した。東京に空襲が迫っていたからだ。

昭和二十年、四月に入り、三年生として登校した私たちを待っていたのは、教室の中の授業ではなく、校庭を中心とした軍事教練だった。

軍事教練の基本は、小学校四年の時から受けていた。担任が勤皇の志士を自称する軍国主義者で、授業中は背筋をピンと伸ばし教師をしつかり見続けるといふ軍関係の学校で行われている授業法が用いられて、少しでも違反すればビンタを見舞われた。

体操の時間は不動の姿勢から始まり、号令のかけ方、隊列、行進、敬礼の訓練、海軍体操、駆け足などが卒業まで続いた。

中学校に入学して軍事教練が始まると、私は、すぐに教官（本職の陸軍将校）から目を付けられ、同級生の前に出て模範演技をさせられるほど板についていた。

だが、中学三年になって始まった軍事教練は、まったく新しいものだった。対戦車特攻訓練、対米兵ゲリラ的刺殺訓練だった。

前者は、対戦車爆薬を胸に抱いて米戦車のキャタピラの前に身を投げる、という訓練である。そうすれば、戦車が私の体を踏みつぶす。すると、私が胸に抱いている爆薬が爆発して戦車を破壊する、と教

えられた。

実に簡単なことである。訓練の必要など何もないように思える。

だが実際は、非常に難しかった。

第一は、戦車は動いており、自由に方向を変えることもできるし、速度を速めたり、停まることもできる。ちゃんと踏みつぶされる為には、戦車との駆け引きが必要だった。

第二に、戦車は機関銃を装備していて、少しでも早く機関銃の死角に入る必要があった。

訓練は、戦車の役と飛び込む役に分かれて勝敗を競うというものだった。もちろん、役は交互に替わる。戦車の役は、ゴムタイヤのリヤカーを押して走る。跳び込む役は、爆薬のかわりに、重さ2、3キログラムの土嚢を抱く。

これは、何かの遊びのようでもあり、スポーツの一種のようなものでもあったが、訓練の最中、いつも私の胸中には、戦車に踏み潰され、爆薬でこの体がこっぴみじんにかき飛ばす為には、本番で壕から飛び出せるだろうかという懸念があった。だが、「行け！」の号令で、すかさず壕から飛び出さない者は、「即座にその場で射殺する」と教官は言っていた。

当時の陸軍刑法では、戦場では、戦線から逃亡しようとしたり、上官の命令に従わない兵は、軍法会議を経ることなく、直属上官がその場で部下を射殺していいことになっている、と聞かされていた。だが、多くの上官は部下を憐れんで叱りはするが射殺まではしない、ごく一部の非人間的な上官だけがす

ることがあったとも、他の大人から聞いていた。

しかし、この人なら本当にそうするだろうと思わせる非情さを、この陸軍中尉は感じさせた。進むも死、留まるも死、である。

不思議なことに、この訓練が始まってから、生徒たちが目立って明るくなった。

休み時間など、ふざけたり、冗談を言って笑わせたり、和気あいあいとしていた。

転校生に対するいじめもなくなった。

前年の二学期、東京の中学から、この山梨県の中学に転入した時、転校生は「来たり者」と呼ばれて差別されていた。私も、掃除当番の時「お前は来たり者だから、水を汲んで来い」とか「来たり者は便所掃除をしろ」などと言われた。

また、転校して間もない昼食の時だった。私の机の上でドスンと音がした。私が弁当から目を上げて見ると、九寸五分が突き刺さっていた。

九寸五分は「あいくち」とも言い、戦前のヤクザや右翼の暗殺者が常用した。プロレスの力道山や、社会党代表の浅沼稻次郎の刺殺に使われたのも、この九寸五分だった、

私は何気ない顔をして、私の顔をじっと見つめているNに、

「いいもの持っているね。どこで手に入れたの？」と訊いた。意識しての表情と言葉だった。

小学生の頃から、脅しに遭ったかどうか対応するのが良いか、いろいろな体験から私は自分なりに会得していた。暴力が日常茶飯の時代だった。

私はNの反応を待ったが、Nが無言のままなので、さりげなく弁当に戻った。

Nはしばらく私の顔を凝視しているふうだったが、やがて九寸五分くすんごぶを抜いて戻って行った。

私は、学級の中では三人目の転校生だった。

最初に転校してきた者が、もっともひどく、いたぶられていたらしい。彼、Aは、いつも、とてもオドオドした表情をしていた。次に転校してきたBは、オドオドした表情ではなかったが、いつも身をすくめているように見えた。

直接、言葉や暴力で転校生をいたぶるのは、何人かの限られた生徒たちだった。他は皆何も無いかのよう、いじめを無視している、と私は思っていた。だが、後ろの席のGと二人きりになった時、「絶対に逆らうんじゃないよ。逆らうと、もっとひどい目に合うから」と囁いてくれた。その音声から、Gが親身に私を心配してくれていたのを感じた。だが、G自身、転校生ではなくても、ひっそりと身を縮めているような感じを受けた。暴力で教室を支配しているグループがあるのかと思った。

先生たちも知らぬ顔だった。ある時、Aが誰かにひどく殴られて赤黒く顔を腫らしていた時でさえ、

それを問題にした先生はいなかった。「来たり者」に対する差別意識が心のどこかにあったのかもしれない。

私が入った学級の担任は中年のMという教師だった。生徒たちは「腹黒」などとも言っていた。私が転校して間もない頃、最初のMの授業が始まる時、

「教科書を持っていない者は居るか？」

とMが訊ねた。

私は手を挙げて、

「転校してきたばかりで、まだ教科書を持っていません」

と、答えた。

当時は、転校手続きが終わると、学校から出版社に連絡し、やがて教科書が送られてくる、という仕組みだった。紙も品薄になり、地元の書店が、転校生などの為に、あらかじめストックしておく、などという余裕がなくなっていた。

「ふん、教科書が無いか」とMは、少し考えるそぶりを示してから、

「教科書が無ければ、教室に居てもしかたないな。そうだな、廊下に出て立ってる」

と言った。

私は、何ら、私自身の罪でも責任でもないのに、一時間、廊下に立たされる破目になった。

私はMを恨んだ。これが、転校生いじめをする上っ調子の同級生なら、ただ軽蔑するだけだが、教師ともなると、軽蔑するだけで済ませる訳にはいかなかった。

だいたい、Mは、私がまだ教科書を手にしていないことを知っていたはずである。何故なら、それから何日か後に、私は、M自身の手から全教科の教科書を受け取っているからである。この学級の転校生は、私が三人目だった。Mは、私の前に転校生を二人迎えていたのだから、教科書がすぐには届かないことを知らないはずはない。知っていて意地悪をしたのである。この辺が、Mが生徒から「腹黒」と呼ばれているゆえんかもしれない。

私は執念深い性なぶがのかもしれない。いつかMに復讐してやろうと、腹の底で思い定めた。そして、三年後の中学五年の時、再び担任になったMを、あることでまんまと欺いてやって、胸の中で留飲を下げた。

このような、教師までも含む、転校生に対するいじめが、沖縄戦が始まり、次の本土決戦を想定しての特攻の訓練が始まって皆が死に直面するようになった時、ひとりでに薄れていったのである。そして、

学級は明るい和気あいあいとした居心地の良い雰囲気になった。「来たり者」と呼ばれることもなくなった。

学校に居るあいだ、また、下校の時、同じ方向に帰る数人の級友と一緒に居る時は、私も明るい雰囲気の中に居て、特攻の「死の問題」を思い出すことは、あまり無かった。だが、一人別れ、一人離れ、最後に独りになった時、この「死の問題」が、ワッと心の中を襲ってきた。

進むも死、留まるも死、である。

だが、私は死にたくなかった。

いくら、「お国の為」「天皇陛下の為に」と聞かされても、やはり、死ぬのは嫌だった。しかも、悪いことに、当時の世相では「嫌だ」と言えないのである。

軍の命令があれば、たとえ軍人ではない一般人、しかも未成年の中学三年生でも、「国の為」「天皇陛下の為に」と言われれば黙って従うしかなかったのである。もし、「嫌だ」と言えば、軍事教官を中心とした教師陣から、また生徒たちから、「来たり者」どころではない差別や罰に見舞われるのが、目に見えていた。

当時の人々は、本心はどうであろうと、言葉や行動にして「国の為、天皇陛下の為に」というスローガンに従わない意思を明らかにしたが最後、たちまち「非国民」「売国奴」等の罵詈雑言の嵐に見舞われ

ることによっては、警察、高等警察（今の警察組織の中の公安部のように、反社会的思想や行動を重点的に取り締まる組織）、さらには憲兵（本来は、陸海軍の軍関係者のみを対象にした警察組織だったが、いつのまにか、高等警察や警察まで支配下に置くようになって、国民全部に目を光らせるようになり、死に至る拷問で名を轟かせ、国民にもっとも恐れられた組織）に連行される恐れもあった。

当時、反愛国的な言行を取り締まる法律として「治安維持法」という法律が施行されていたが、憲兵に至ってはこの法律さえ無視して恣意的に罪人に仕立て上げ、残虐極まりない拷問などを行なう者も居たのである。憲兵は、ほとんど、治外法権的組織、と呼んでもいいほどだった。

私は、ひそかに、事前に逃亡することを考え始めた。

米軍が間近に迫り、出動命令が出てからでは遅い。「敵前逃亡」というレッテルを貼られれば、警察や裁判所を通すことなく、直属の上官（私の場合、学校の軍事教官になる）に、その場で射殺される恐れがある。

かと言って、米軍が本土に上陸しても、この山梨県の片隅まで攻め寄せて来るかは定かではない。いつ逃亡するか、そして、どこへ逃亡するか、この二点が大問題だった。

私は、まず、山に逃げることを考えた。家の庭から見える近さに南アルプス連峰があった。また、北西には八ヶ岳山系がある。いずれも三千メートル級の山々が連なり、中腹から上には人が住んでいない。

暗くなつてから、ひっそり家を抜け出し、人目を避けて夜間のみ歩き、日中は森の中か山中で休みながら何日か歩けば、めざす山系の中腹まで、捕まらずに行けそうに思えた。

私は、同級生にはもちろん、母にも内緒で、独り、ひっそりと家を出るつもりだった。

もし、同級生の誰かに話せば、その話が、いつしか広まり、やがて学校側にも伝わり、逃亡を阻止される恐れがあった。

また、母に話せば、逃亡が発覚した後、息子を阻止しなかった責任を母が問われることになる。

だが、逃亡を決行しようとする、さまざまな現実的な困難が立ちまわっていた。

まず、当面の食料の確保の問題である。

逃亡時に、できれば数十日分の、少なくとも数日分の食料は持って行きたいところである。

ところが、この当時、食料はすべて配給制によって制約を受け、配給手帳なしには何も買えないという事になっていった。配給手帳は一世帯に一冊ずつ渡され、もし私が持ち出せば、母や妹たちは配給を受けられなくなり、たちまち飢えてしまう。しかも配給所は一所のみに限定されており、たとえ私が配給手帳を持ち出しても、どこからも食料は得られなかったのである。指定された場所に行けば、たちまち私の存在がばれてしまう。自販機など、どこにも無い時代の話である。

第一、はじめから、私は、人の居る所に逃亡するつもりはなかった。人の住まない山岳地の奥深くに入るつもりだった。それなら、捕まる確率は非常に少ない。だが、餓死と凍死の確率が非常に高くなる。

季節は夏に向かっていった。山中でも、熊、鹿、猪が動き出す頃である。これらを捕らえられれば申し分ないのだが、銃を持たない私には、とうてい叶わぬ望みに過ぎなかった。

秋になれば、山栗（しじみ位の大きさ）、どんぐり（アク抜きをしないと、渋くて食べられない）、あけび、木苺等の山の恵みにありつけそうである。だが、これも、山梨県に疎開して以来、一年足らずの間に、大家のおばさんや級友たちの話から得た聞き覚えにすぎない。実際に山中に分け入って、私自身で確かめた事実ではないのである。

冬から春にかけての数ヶ月が最大の難関だった。食材をどこから得るか、零下二十度か、それ以下にも下がる標高千数百メートルの山中で、どうしたら寒気を凌げるか？ 火を焚けば煙が立ち、人目につく。まさに難問だった。逃亡も、また、死か！

いくら考えても、私に生きる道は見つからなかった。

この、解決策が見出せない難問を心の中に抱えたまま、それでも毎日私は学校に行き、特攻訓練に加入っていた。

だが、思わぬところで、私の心の中の難題が一挙に溶けて無くなった。

八月十五日の終戦を告げるラジオ放送だった。

張り詰めていたものが、どっと溶け去ったせいかな、その日、私は抜け殻になって虚脱した状態で過ごした。

級友たちも同じようなものだったのか、終戦を口惜しがったり悲しんだりした者は、誰も居なかった。表面では明るく賑やかに振舞っていたが、内心では死の恐怖と格闘していたのだろう。列の中で私に見える範囲内に居た者たちは、終戦を知って、一様に、あっけらかんとした、同時に、ほっとした様な表情をしていた。本心のところは、皆、私と同じだったのである。

あの、妙に明るく賑やかな振舞いは、死にたくない本心を、他人の目はもちろん、自身の目からもそらそうとする虚しい努力だったのではあるまいか。そして、もう、そういう努力をあえてする必要もなくなり、もちろん、死からも免れ、心底からほっとしているのではないか。これは、ずっと後になって、八月十五日の、あのラジオ放送を在校生徒と教職員全部が校庭に集まって聞いた日の、あの状況を思い出した時、思ったことである。

十六日間の短い夏休みが終わり、九月に入って登校すると、教室の中では、いろいろな想像が飛びか

っていた。

「米軍がやってきたら、学校なんか無くなるぞ」

「俺たち皆奴隷だな」

「殺されるかもしれないぞ」

皆の心の中に、戦争中さんざん言い聞かされた「鬼畜米英」というイメージが固く焼き付いていたのである。

「勉強しても、しょうがないな」と、私は思った。

夏休み中、農作業の手伝いに行っていた近くの農家に、この辺りには珍しい「日本文学全集」という数十冊に及ぶ大判の本が本棚に並んでいた。私は、さっそく第一巻を借りて、家に帰って読み始めた。

全巻読み終わるまで、一年はかかったと思う。

家で読むばかりでなく、学校にも持って行った。休み時間に読んでいた。そして、教科書やノートなど学習に必要なものは、すべて学校の机の中に入れて放しにした。家に持ち帰っても、それらを使う暇がなかったからである。文学全集を読むのに忙しくて。

この経験も後に役立つことになる。

極東軍司令部が政府の上に乗って日本を統治するようになって、中学生の生活に、たいして変化は起きなかった。奴隷にされることもなく、学校も無くならなかった。

だが、変化は、まず先生方の方に現れた。

教壇の上で「必勝の信念」「鬼畜米英」を、胸を張って声高に説いていた先生は、急に肩をすぼめ、声も小さくなっていった。

だが、驚いたことに、半月もすると、その同じ先生が「民主主義」「自由」を説き始めたのである。私は、ただ啞然とした。つい少し前と真逆のことを言い出したからである。「この人、本当に自分が言うことを信じているのか？」

それから何ヶ月かのあいだに、私の内部で何かが根底から崩れていった。

何が崩れたのか、その時は自分でも良く解らなかったが、今は良く解る。「権威への信頼」が崩壊したのである。

権威とは、当時の私にとって、政府と先生だった。この両者への信頼が崩れたのである。

今から思えば、私の内部に起こった「権威への信頼の崩壊」が、他の生徒たちにも起こっていたように思う。だが、その結果、起こした行動は、一人一人、まちまちだった。

ある者は、ことさら校則を無視し、弱い教師をおちよくりだした。それは、立場の弱い「来たり者」いじめをしていた連中とは、別の生徒たちだった。「予科練帰り」が先頭に立っていた。

私たちのクラスにも、戦時中、陸軍幼年学校や海軍飛行予科練習所（通称「予科練」）に行っていた者が十人近くも入っていた。

幼年学校生徒は、文字通り「品行方正、学業優等」で、その点は、戦後になっても変わらなかった。一方、予科練帰りには、大胆放縦、学業非優等の者が多く、権威には反抗し、強い者同士ではケンカもするが、弱い者いじめはしないという傾向があった。

幼年学校は、中学一、二年の時だけ、受験資格がある。しかし、非常な難関で、学業だけでなく、品行方正で、しかも近視や、結核菌などの伝染性のある病原菌を持たない者だけから選ばれる。

一方、予科練は、中学二年以上の者で、近視や、伝染性の病原菌を持たない者が受験するが、私が中学三年になった昭和二十年頃になると、学業や品行の方はあまり問われず、近視や、伝染性の病原菌を持たずに身体強健であれば、たいてい入れたようである。彼等は、どうにか飛べるようになると、特攻に行かされるはずだった。だから、この年入った私の同学年生たちは、特攻を承知で予科練を志願し、入ったのである。もっとも、志願しなかった私たちにも、対戦車特攻が割り当てられていたが。

幼年学校に入った者には特攻はなかった。陸軍士官学校生徒や海軍兵学校生徒も同様で、彼等は陸海軍のエリートとして温存される予定だったが、予科練生や中学生は消耗品並みの扱いだった。私たちは、遠からず死なされる定めにあったが、終戦によって辛うじて生き延びることができたのである。

だから、自分たちを死に追いやろうとした人たち、即ち権威者に反感を抱くようになったのも、至極当然のことだった。

*

頭から布団をかぶった少年は、そのまま身じろぎもせず、一時間にも及ぶ私の独り語りに耐えていた。彼が、どう思いつながら私の話を聞いているのか、私には知る由もなかったが、ただ、気配で、彼が私を拒絶せず受け容れてくれている、と感じていた。

それで、最後に「また、来る」といって部屋を出、父親と次回の訪問の時間について打ち合わせ、その日はそれで、その家を辞した。

この間、母親は一度も顔を見せなかった。

私が終戦前後の話をしたのは、単に、過去の私が体験した出来ごとを知ってもらおう為ではない。それ

らの体験をする度に、私が、どう感じ、何を思い、何をしようとしたかの心情を知ってもらおう為だった。

生きている間、人の身に起こる出来ごとは、人それぞれである。しかし、体験に伴って生起する心情には、共通するところが少なくない。

私が話した心情の中で、今、少年が感じている心情に通じるものがあれば、少年は私に共感を感じ、年令や立場は違っても、私を異質な人間とは思わず、自分の今の心情が、あるいは通じる相手かもしれないという感じを起こさせ、私の接近を許す気になるだろうと考えたからである。

真夜中の家庭訪問

次は、午前一時に訪問した。

父親の話で、少年は両親が寝てから起き出し、居間で深夜テレビなど見ているようだと言ったからである。そこで、裏口は鍵を掛けないで欲しいと、前回の訪問の時、父親に頼んでおいたのである。

私は、できるだけ音を立てないように、足音を潜めて勝手口から入り、台所を通り抜けて、廊下を少年の部屋に向かって進んだ。廊下の片側に両親が寝ているようだった。あるいは、寝たふりをして私の訪問を心待ちにしていたかもしれない。いずれにせよ、廊下と部屋の間には障子があるだけである。私は、抜き足、差し足で、できる限り静かに歩いた。ふと、自分が泥棒になったような気がして、おかしさがこみ上げてきた。笑いを噛み殺しながら、少年の部屋の前を通り抜けた。居間に明かりが見え、テレビの音が聞こえていた。私はもう忍び足をやめて、普通に歩いた。私が来たことを予告する為だった。私は障子を開けた。少年はこちらを振り返った。この時、初めて、互いに顔を確認しあった。

「やあ」と私は声をかけた。

少年は無言で頷き返した。私は彼から少し離れ、部屋の隅に座った。私が離れて座ったのは、少年になるべく圧迫感を感じさせない為である。そして、親密度が増すにつれて、徐々に空間の距離も縮めていくつもりだった。

私は、彼の見ているテレビを見ながら、何か感じたり、思ったりするたびに、その感じや思いを短いことばにして口から出した。独り言とも、話しかけているともとれる言い方で。これもクライアントに緊張感や圧迫感を与えない為である。

人は、誰とも話をしたくない時に話しかけられると、何も言いたくはないが何も言わないと、相手の話しかけを無視したことになるおのずと緊張するものである。しかし、相手が独り言を言ったのなら、何も返事しなくても緊張しない。

また、相手の独り言に触発されて何か言いたくなったら言える自由もある。私は、何か言うか言わないかを少年の好きに任せたのである。

その日、少年はひとことも発しなかった。

テレビが終って、私が「また、来る」というと、黙って頷いた。

それから、数日おきに、深夜の訪問を続けた。深夜はバスも国鉄も走らないので、いつも往復とも歩きたかった。片道三、四キロだったろうか。私にはちょうどいい運動になった。

指導主事になって、私にとって不都合なことが一つあった。それは、運動をする機会がないということだった。

中学の教師をしていた頃は、よく生徒と相撲をとった。三年生の体の大きい生徒とやると、いい運動になった。

高校に勤務した時は部活の顧問をし、生徒と一緒に跳ね回っていた。また、体育館に鉄棒がセットされている時は、すぐ飛びついた。相撲と鉄棒は、小学生の時から馴染みの遊びだった。私が小学生だった一九三七年から四三年の時代、子どもの遊び道具は鉄棒と肋木わきぼくしかなかった。遊び時間（正式には休み時間だが、私たちには遊び時間で、この時間こそが学校に行く目的だった）になると私たちは、飽きもせず、相撲か鉄棒で遊んでいた。

しばらく深夜の訪問が続くうちに、いつとなく会話が始まった。まだ、テレビの内容についての雑談にすぎなかったが。

その頃、父親から電話があり「近頃は、暗くなると近くのレコード店に行って、レコードを買ってく

るようになりました。訪問は八時くらいでけっこうです」という内容だった。

夜八時頃訪問すると、彼はテレビで野球を見ていた。

私は、プロ野球についてはあまり知らなかったもので、彼に、選手の名や特徴を訊ねた。彼は、かなりよく知っていて、私に解説してくれた。

私が教師になってから学んだことの一つに、教師が生徒に教えを乞うと、生徒はとていねいに教えてくれる、というのがある。そしてまた、その生徒とのあいだに親しい関係が生まれるということも。

秋も深まり、野球がテレビから消えた頃、彼は突然、一学期が終わった時のことを話し始めた。

彼は、大学進学を志していた。その為、この一学期は、これまで以上に学習に努力した。また、学科以外の活動も、大学合否に関係があると知り、生徒会のある役をすすんで引き受け、まじめに務めたつもりだった。

だが、学期末の評価は、前学年よりずっと下になっていた。このことを知った時、「何かが壊れた！」

それ以来、目にするものが、「天然色映画から白黒映画」に変わった。

*

目に見える世界が「天然色から白黒に変わった」経験は、私にもあった。中学二年になってすぐのことだった。

その日、昼食後、私はいつものように運動場にいた。いつもは、校庭の隅の砂場で相撲や鉄棒をしているのだが、その日に限って、校庭の真ん中で何人かの級友と話をしていた。

ふと気がついた時、私の間近に、私よりはるかに体の大きい上級生が、後ろを振り返って、追いかけてくる誰かに笑いながら何か言いつつ走ってくる。それが目に入った瞬間、上級生は斜め横から私に衝突した。

私は真後ろに倒れ、後頭部をしたたか地面に打ちつけ、気を失った。

やがて、私の名を呼ぶ声が聞こえてきて、倒れたままの私を取り囲んでいる大勢の中に、私に呼びかけている級友の顔が、ぼんやり見えてきた。

私を取り巻く輪の中に、私を撥ね飛ばした上級生の顔も見えた。さすがに心配そうな顔をしていた。

意識の戻った私を見ると、級友はすぐに私の腕を取り、両側から支えて校舎に向かった。私の頭はまだぼんやりとしており、自分の足で歩いてはいたが、宙を歩いているような夢遊の歩きだった。

級友は、私を両脇から支えたまま、教員室に入り、三十代の体の大きい先生に、私に代わって、いきさつを説明した。

先生は、聞き終わると「裸になれ」と言った。

級友も手伝ってくれて、私は上半身裸になった。先生は私の胸から腹の辺りに掌を当てて、あちこち撫で回した後、

「ケガはしていない、大丈夫だ、心配しなくていいぞ」と言うと、棚から赤チンを取り出して、私の胸の真ん中に大きな丸を塗った。日の丸に見立てたようだった。

「これで大丈夫だ。教室に戻って授業を受けろ」

私は再び級友から両脇を支えられて教室に戻った。すぐに午後の授業が始まった。英語だった。

始業の礼が済むと、教師はさっそく、

「宿題の文章を暗記できた者は手を挙げろ」と言った。

クラスの半数くらいが手を挙げた。私も手を挙げた。私には自信があった。前夜、私には珍しいことに、多くの時間を割いて指定された章の教科書の英文を記憶し、おまけに、念を入れて、女学校に行っていた姉に教科書を渡して、私の暗誦に抜けや誤りがないか確かめてもらっていたのである。

私が指名された。

私は椅子から立ち（当時は、教科書の朗読や暗誦などは立ってするのが習慣だった）暗誦しようとした。

だが、最初の一句から、まったく何も浮かんでこない。おかしいな、昨夜はたしかに暗誦したのに、と思いながら、思い出そうとしたが、冒頭の単語だけでなく、途中も終わりの一言も浮かんでこない。何について書いた文章だったかも、まるで思い出せない。

茫然と私は、ただ突っ立っていた。

「どうした？」と教師が訊ねた。

「昨夜はたしかに覚えたのに、何も思い出せないんです」と私は答えた。

「そうか、それじゃ焦らずに落ち着いて思い出してみる」

英語の教師は、昭和十九年には珍しく、非軍国主義的な人だった。

軍人でもない普通の大人が、軍服まがいのカーキ色の国民服を着て、脚には兵隊と同じカーキ色の厚手の布のゲートルを捲いている世の中で、この英語教師だけは、赤茶系統の背広、ネクタイ、シャツという、英国紳士風の服装を変えなかった。通勤の途上、近所に住む人々、道行く人々、通勤時の電車の中の人たちなど、一様に彼に振り向き、注視したに違いない。中には「非国民！」「アメ公のスパイ！」などという罵声を浴びせる者も居たかもしれない。当時の日本では、彼の服装は、それほど異質で目立っ

たのである。

にもかかわらず、世相に同調せず自分のスタイルを貫き通していた彼を、今も私は立派だと思う。

言われたように、私は心を落ちつけ、ゆっくり思い出そうとした。だが、いつこうに一言もでてこない。「おかしいなあ！」と私は思い続けていた。

そのうちに、忍耐強かった英語教師の顔色がだんだん変わってきた。

まず、不快感が表情に露わに浮かんで来て、さらに、それに怒りの表情が加わってきた。

「嘘をついたのは許せない！」

彼の語気には憎しみすら感じられた。

私は驚いて教師に答えた。

「嘘はついていません。昨夜はたしかに暗誦できました」

「それなら、どうして、今言えない！」

教師の反論に、私は何も言い返すことができなかった。まさに、その点が、私自身が不思議でならないことだった。

「嘘つきは罰しなくてはならない。椅子を担いで運動場を二十周してこい」

私は黙って木製の腰掛けを持ち、教室を出た。一語すら暗誦できないので、従うしかなかったのだ。運動場におりると、私は腰掛けを担いで運動場の周囲を走り始めた。

走り始めると、私は、だんだんあることに気づき始めた。運動場の風景も、運動場の中で軍事教練をしているどこかの組も、いつもの見え方と何か違うのである。

強いて言えば、色彩がなく、一様に灰色っぽく見えるのである。そして、走っている自分自身に現実感が無かった。現実には走っていないながら、夢の中で走っているような感じだった。

軍事教練をしている生徒の目も、まったく気にならなかった。嘘をついた訳ではないのに、嘘つき、と決めつけられて罰を受けていることも、まったく恨みに思わなかった。

ただ、どうしてだろう？と、一言も頭に浮かんでこない不思議さだけを思い続けていた。ほんの少し前、後頭部を地面で強打したことを忘れていた。

走り終えて教室に戻った時は、英語の授業は終わっていた。私は四十分以上も走り続けていたことになる。だが、息の苦しさも疲れも、まったく感じなかった。

運動場は、一周二百五十から三百メートルだった。二十周すれば、五、六千メートルの距離になる。いくら、腰掛けという荷物があるにせよ、四十分はかかりすぎだった。おそらく、よろよろ、ふらふら走っていたのだろう。なのに、苦しさも、疲労も、まったく感じなかったのだ。

そればかりか、いつも見慣れている運動場の風景が、いつもと違って見えた。

時は四月、校庭の周囲を取り囲んでいる樹々は緑の葉を繁らせたばかりで、一年のうちでも、もっとも明るい季節のはずである。それが、灰色の霧に包まれたかのように、ぼんやり見えていた。

下校の時にもそれは続いた。

学校のある青山から渋谷駅に向かう道を級友と一緒に歩きながら、私は一言も口を利かなかった。心を閉ざしたというより、感情が無くなっていったという方がいまいだろう。

そして、街の景色が、やはり灰色だった。そして、茫漠と感じられた。

私は、その後、一日も休まず登校していたが、授業に付いていけなくなっていた。特に、英語、数学、理科がひどかった。頭がぼんやりしていて、先生の説明も理解できず、また、英語などは記憶できなかった。一年の時は、授業に集中さえしていれば、大体付いていけたのに。

中間試験の結果は惨憺さんたんたるものだった。

期末試験の結果も同様だった。

一学期の終わりの通信簿には二百五十人中二百何十何番と記されていた。

これを見て、私は驚いた。成績が下がったことに驚いたのではなく、「俺より下がまだ居たのか！」と驚いたのである。私は、通信簿を見る前から、自分は、てっきり最下位だと思込んでいたからであ

る。

そして、この成績を最後に、私は、この学校を去った。

この年の七月、サイパン、グアムが相次いで米軍の手に落ちると、戦地の父からの手紙に「東京に米軍の空襲が始まるから、できるだけ早く疎開するように」とあり、父の出征前の仕事上のルートを経て、山梨県の農村の郵便局長に疎開先の紹介を依頼してある、と付け加えられている。私の一家は急いで引越しの準備にかかった。

*

私が、私自身の体験を、かなり詳細に書いたのは、「天然色で見えていたものが、白黒に見えるようになった」という少年の感覚や心情を、私なりに理解する為に、類似していると思われる体験を、できるだけ具体的に思い出し、その時の感覚、心情等をもう一度味わい直そうとしているのである。そして、この体験と感覚、心情等を少年に語り、

「きみの今の感覚に似ているだろうか？」

と訊ねた。

「似ている」と少年は答えた。

「何かが壊れた」という言葉に、私はもつとも注目していた。だが、私の内部に「何かが壊れた」という表現に相当するような体験は浮かんでこなかった。そこで、私は専ら少年に語ってもらうようにした。

少年がどのように語ったか、今は覚えていない。ということは、ここは私が共感的に理解できなかったということである。

だが、その日以降、私が訪問すると彼はテレビを消して、専ら話だけをするようになった。

その頃、父親からの連絡で、「近頃は、日が暮れると外を走ったり、庭でバットを振っている」ということだった。そして、訪問の時間も早くなった。

訪問は翌年の三月末まで続けた。

この間、秋の頃から教育研究所設立に向けての準備が始まり、指導室長と私が、専らその任に当たっていた。

四月、教育研究所が業務を開始すると、私は、そこで教育相談を担当することになり、指導室を離れた。専用の相談室もあることから、少年を教育相談室に誘った。そして、昼間、週一回のペースでカウンセリングを行った。彼は休まず通って来た。

前年の秋、少年は、大学受験に向けて受験勉強を始めていた。しかし、思うように捗らなかった。以

前と違って、頭に入り、そして記憶として留まる、ということがなかった。

少年は努力を続けたが、成果が一向に現れなかった。

*

私もそうだった。授業には出ていたが、あまり頭に入らなかった。二学期の成績は、転校先の学校が、前の中学にくらべて学力の平均レベルが少し低かったのか、真ん中あたりに留まっていた。

三学期になると、二クラスが一つの教室で授業を受けるといふ異様な事態になった。椅子だけ持って移動したが、二人が一つの机では、ろくにノートもとれなかった。

これは、四、五年生の軍需工場への動員に伴って、教師が多数付いていったからである。建前では、昼は工場で働き、授業は夜するということで、工場に付き添う教師と授業の教師とで、学校での授業以上に、多数の教師が付き添って行ったからだった。

私の三学期の成績は相変わらずだった。

昭和二十年四月、三年の一学期が始まると、前述したような特攻の訓練と、近くの山のトンネル掘りで明け暮れて授業はなかった。何のためのトンネルか、説明は何もなかった。一学期は終戦と共に終わり、通信簿も成績順位もなかった。

二学期が始まると、以前のような授業に戻った。だが、私は教科書もノートも筆記用具等も机の中に入れて放しにし、近くの農家から借りた日本文学全集の一冊と弁当だけを持って登下校していた。中間と期末試験の時だけ教科書、ノートを持ち帰り、申し訳程度の勉強をしたが、中位の成績順位は変わらなかった。

次の年はひどいものだった。試験の前日、家に帰り、試験の勉強でもしようかと思っただが、家には教科書もノートもなかった。学校から持ち帰るのを忘れたのだ。翌日の化学は百点満点の十点だった。答案を返す時、教師は「こんな成績では、上級学校の進学は無理だな」と言った。私もその通りだと思った。

二学期になっても、私は変わらなかった。

秋に入った頃、父戦死の公報が入った。終戦から一年あまりも経っていた。

ある会社の札幌支店長をしていた叔父（父の弟）が来た。そして、私に「中学を終えたらどうする？」と訊ねた。私は答えなかった。本心では進学は無理だと思っていた。父の戦死により無収入になった我が家の経済状況、その上、転倒後遺症の頭では、上に進めないだろうと思っていた。かと言って、この農村には勤め先も見当たらぬ。

黙っている私に、叔父が言った。

「北大はどうだ。住と食は家でできるから、うちの会社でアルバイトをして学費とこづかいは自分で稼げばいい。また、受からなかったら、うちの会社に勤めればいい」

私は頷いた。そうか、そういう道があったのかと、はじめて思い至ったのである。

叔父が帰った日から、私は中学一年の教科書を引っ張り出してきて、そこから大学受験の勉強を始めた。中学二年、三年、四年の一学期と、学習を放棄していたからだ。

一年の教程はすぐに終わり、二年の教科書に入ると、たちまち、英語、数学、理科で歩みが遅くなった。後頭部打撲の後遺症が残っていることが感じられた。学校では中学四年の授業を受けているのに、私は中学二年の教科書で悪戦苦闘していたのである。

中学五年が終わると、私はそのまま新制高校三年に進級した。中学五年卒業で社会に出た者、旧制高校や高等専門学校に入った者など多くが去り、高校三年に進んだのは半分以下だった。

中学を卒業した時の成績は、相変わらず、学年の真ん中あたりだった。英数理がなかなか頭に入らない。高校三年になると、布団では眠らないことにした。眠くなると、後ろに倒れて眠った。そして目が覚めると、すぐに教科書に向かった。

高校三年を卒業する時、私が学年三位の成績で、教育長賞を授与されると担任から聞かされて驚いた。だが、思い直してみると、マイペースの受験勉強が三年の途中で学校の授業の進展に追いつき、やがて追い越していた。

数学では、学校ではやらない順列組合せなどを独りで参考書相手に苦闘していた。北海道大学へは奇跡的に入れた。当落すれすれだったろうと今も思っている。

*

教育相談を続けていた少年は、結局、学校へは行かず、大学進学も諦めたようだったが、三月になり、「四月から東京の電気店に就職することになりました」と言った。

食べられない少女とその母親

教育研究所の教育相談を始めると、すぐ、若い母親が、生後数ヶ月の乳児を連れて相談に来た。未熟児で生まれ、発育が遅れているようだが、ということだった。

私は、まだ乳幼児に親しく接した経験がなかった。わずかに、姉のところで二人の甥と接した程度だった。乳幼児に関する専門書も読んでいなかった。

この時、乳幼児教室を開こうと思いついた。生後六ヶ月から一年六ヶ月の子と母を十組ほど集め、互いに子育てについての知識や情報、経験等を持ち寄って交換し合い、また、目の前の乳幼児を見ながら、実践的な、地についた勉強会を開こうというのである。もちろん、私も乳幼児についての専門書や文献も調べ、その知識を母親たちに提供しながら、目の前の乳幼児や母親たちから、いろいろ学ぼうと目論んだのである。

さっそく市報を使って参加希望者を募った。十二、三組集まったと思う。毎週一回、一回二時間、プ

レイルームに母子共に入ってもらい、まだ動けない子は横にしたまま、這って歩く子や、よちよち歩く子は、自由に遊ばせ、私は、子どもたちを視界に置きながら、母親たちの話にも耳を傾け、また、私が用意しておいた文献を配ったりしていた。

一年間続け、次の年、また、新しく参加者を募った。新しく募った人の中に、前年も来ていた母子も何組があった。当初は一歳半までのつもりだったが、親の希望で二歳以上の子も入れることにした。このことが、予期しない成果を私にもたらした。その後、毎年参加者を募った。

乳幼児の成長過程をよく見届けることができた。幼稚園に入るまで、四歳まで続いた母子もいた。私は、多くのことを、この乳幼児たちから学ぶことができた。

育児教室を開ききっかけになった未熟児とその母親は、それきり来なかった。頼りにならない相談員だと見限られたと、私は思っていた。

ところが、何年かして、また訪ねて来た。

今度は、二番目の子の相談だった。二番目の男の子が三歳になり、手に負えなくなってきた。どう対応したら、という相談だった。

今度は、私も自信を持って答えることができた。

「親は子どもに振り回されてはいけません。また、親が子どもを支配してもいけません。親にも、子

どもにも、それぞれの意思があります。互いに、お互いの意思を尊重し合い、その上で互いの協調点を見つけて協調していく関係を構築していくのが、最上だと思えます。

さっきのお話の具体的な例で言えば、朝からチョコレートを食べたいと言っても、与えてはいけません。お母さんとしては、当然、お子さんの健康、その為の栄養を一番に考えなければなりませんからです。お子さんが、どんなにわめいても、泣いても、決して与えてはいけません。しかし、お子さんに、お母さんが用意した朝食を食べることを強要してもいけません。食べる食べないは、お子さんの意思に任せます。

すでに食事の終わった人の食器は片づけてください。ただし、まだ食事をしていないお子さんの食事は、そのままにしておいてください。お腹が空けば、必ず食べます。ご飯も味噌汁も冷めているでしょう。もし、お子さんが温めて、と言えば、温めてやってもいいでしょう。しかし、冷えたご飯や味噌汁を食べるのも、お子さんの自己責任なのです。暗黙のうちには、自己責任ということを経験的に覚えさせるというのも大事なことです。

お子さんの駄々は、この後何回か繰り返されます。その度に、お母さんは、同じ態度を一貫してとり続けてください。すると、気がついた時に、お子さんは、駄々をこねない子どもになっています。

最初にも言いましたが、子どもに振り回されないということ、また、子どもに食べることを強要しないということ、お腹が空いて自発的に食べるのを待つ、ということのほかには、駄々をこねるといふ行為

を叱ったり、論したりしないでください。押さえるのがよくないというのは、幼児なりの自己主張や自己表現を叱ったり、押さえていると、自己主張や自己表現をしない子、あるいは、できない子になってしまいます。そのままだと、集団不適応になり、学校にも社会にも居られなくなり、家に閉じこもることになります。もし、抑圧がそれほど酷くなく、思春期になってエネルギーを外に噴出させることができれば、暴走族や暴力行為など、反社会的行動に出ることもありますが、これは、二十代のうちに、なんとか社会の中で生きていけるようになります。

そのほか、遺伝的要素や環境によって、さまざまな出方をしますが、一々は言い尽くせません。とにかく、抑圧も、子に振り回されることも、子どもの健全な成長を損ねます。

親を振り回す味を覚えた子は、親以外の人も振り回そうとしますが、思うようにいかず、やはり集団不適応になり、不平不満だらけの人生を送ることになるでしょう。

二、三歳の時の親の対応が、子どもの一生に影響を及ぼすほど、大きな影響を残します」

この時、乳児への親の対応こそ、二、三歳時への対応以上に重要だということを、私はまだ強く認識していません。

次にこの母親が来所したのは、それから数年後だった。

長女が、口に入るものいっさいを受けつけず、今点滴で命をつないでいるという。小学四年になっていた。

私は、母親に次のように指示した。病める子どもには指示をしないが、その子に何をしたらいいかと問う親や教師には指示をしていた。

「M子さんの一番好きな物を冷蔵庫の一番目に入りやすいところに置いてください。ただし、〇〇が冷蔵庫にあるよとか、〇〇を食べてみたらとか、少しでも食べる方への誘導と感ぜられる言葉や行動は、決してしないように細心の注意を払ってください」

これは、M子がときどき冷蔵庫を開けて中は見ているが、手は入れないまま閉めていると聞いたからだった。

数日して、母親から「食べました」という弾んだ声の電話があった。何日か冷蔵庫の扉を開けて中を見、やがて閉めていたが、今日遂に手を伸ばして〇〇を取り、おそるおそる食べた、ということだった。できるだけ早く、M子を私の所に連れて来るようにと答えた。

M子は、身体の発育は遅れていたが、知能は標準以上だった。特に表現力が優れていた。知能テストをした訳ではないが、最初の数分の会話ですぐに解った。

そこで、遊戯療法ではなく、カウンセリングから入ることにした。

最初、M子は戸惑い気味に周辺のことを話していたが、すぐに心の中を話し始めた。

学校の朝礼の時間中、いつ倒れるか不安でたまらない。でも倒れたことは、これまで一度もない。前に倒れた児童を見たことがあり、それから自分も倒れるのではないかと不安になった。

また、遠足が近づくにつれ、バスの中で吐くのではないかと不安に襲われる。これまで吐いたことはないが。

弁当の時間、一緒に食べてくれる級友が得られず、独りになるのではないかと不安になる。学校の給食なら、グループが決まっているので、不安はない。ただ、全部食べられなくて残したらという不安はいつもあった。残さず全部食べなさいと指導されていたから。

家族でデパートの食堂などに行った時、弟は値段を気にせず、いつも一番好きな物を注文するけど、私は、好きな物を注文しても、もし全部食べられなくて残したりしたら、お金を出してくれる親に申し訳ないので、いつも一番量が少なくて安いものばかり注文していて、お母さんが「そんなのでいいの?」と言ってくれても、「うん。これがいい」と答えるんだけど、本当は、他に食べたいものがあるのに、それを注文できないのが悔しい、とも言った。

全部食べ切れないと、お金を出してくれた親に申し訳ない、と言ったM子の言葉を私は心に留めた。

この日、M子のカウンセリングが終わると、私はM子を喫茶店に連れて行き、勝手に、私にはコーヒー、M子にはクリームパフェを注文した。こういう費用は役所からは出ない。私費を使わざるを得ない。

*

余談になるが、市レベルでは、教育相談の仕事は一般行政の中に入っていた。一般行政というのは、二、三年で市民課から税務課へ、税務課から土木課へとというふうに各課を体験し、定年までには市役所の仕事なら何でもやれるというふうになる。専門職はボーイラーマンと公用車の運転手だけだった。

しかし、教育相談を担当するには、高度の修業が必要である。

都道府県レベルでは、教員から選ばれた者が、一年ほど、大学の聴講生として公費で学び、教育相談を担当する例が多かった。その後教頭、校長として学校に戻る。教育相談担当者は準専門家として位置づけられるが、所詮管理職に昇る階段の一部に過ぎない。

だが、教育相談員には創造力が要る。単に大学で教育心理学や臨床心理学を聴講したからといって、教育相談の仕事ができるわけではない。逆にそれらを学ばなくてもできる人もいる。

また、経験も重要な要素である。経験を重ねるほど創造力も高まる。数年の経験を経て、いよいよこ

れからという時に、教頭への転職では専門性は培われない。ただ、教育相談員としての経験は、教頭、校長と昇進しても、生かそうと思えば生かせるのだが。

教育相談員の創造性はサッカー選手の創造性に似ている。サッカー選手は常に全体の動きを見ながら自分の立ち位置を選んで移動し、ボールを持てば、瞬時にドリブルで進むか、誰にパスするか、自分でシュートするかを決めて実行する。選手が、これまでどんな指導を受けて来たにせよ、グラウンドの中では自分の判断で行動しなければならぬ。基本的運動能力や専門的スキルやその他の能力が同程度であれば、創造性の高い選手がもっとも活躍するだろう。

教育相談員にとって、サッカー選手の基本的運動能力に相当するのは、広くて深い教養である。文学、演劇、歴史、哲学等の人文系に加え、動物生態学、宇宙天文学も有益である。動物に関する知識は、人の知性や理性下の感情や欲望、衝動などを理解するのに役に立つ。宇宙天文学は、人生を含めた宇宙の摂理を思索するのに役に立つ。

教養は、人生観、人間観を構築するのに役立つのである。

また、サッカー選手の専門的スキルに相当するのは、児童心理学、臨床心理学、カウンセリングの実習などだろう。

私は、更に運動能力の向上も付け加えたい。体は、児童、生徒に接する時の重要な資源のひとつだか

からだ。高校くらいまでの教師は、生徒と一緒にスポーツをしたり、ハイキングや日帰り登山ができるくらい体力は欲しい。だが、私が見てきた多くの教師の中で、生涯、体力や運動能力の向上に努めていた人は、極めて稀だった。三十年前までの話だが。

体は、人に接する場合の重要な資源の一つだと私は思っている。特に、高校生までの未成年者と接する教育現場では、体という重要資源をフルに活用しないという手はない。使わずに、いたずらに脂肪として体に貯めて、わざわざ自分の健康寿命を短くするというのは、私には、とうてい理解しがたい。子どもたちと思いきり飛び回ればいいのである。子どもとの距離も縮まるし、教室の中だけでは見えない子どもの別の面や、子ども同士の関係も見えてくる。いじめも大幅に減る。多くの教師が、子どもはじめに気がつかないとか、防止できないというのは、教室の中での子どもしか見ていないからである。

*

話を元に戻そう。

ウェイトレスがコーヒーとクリームパフェを運んできた。すぐに私はコーヒーを手にとり、M子には「どうぞ」とだけ言って、煙草をふかしながらコーヒーを飲んでいた。

M子は黙ったまま、じっとクリームパフェを見つめていた。だが、手は出さない。私は黙ったまま、

ゆっくりゆっくり飲んでいた。時折煙草をふかして時間を稼ぎながら。

M子は、私のコーヒー飲みの進捗状態を見ていたようである。私が最後の一口を飲もうと、カップを手にした時、M子はさっと手を伸ばしてクリームパフェを取り、大急ぎで食べ始めた。食べたいという気持ちは無論あったろうが、せっかく高いものをおごってくれたのに食べ残しては申し訳ないという気持ちの方が強かったのだろうと思う。程なくきれいに食べ尽くした。

私が「どうぞ」とだけ言って、それ以上食することを勧めなかったのは、M子の内奥から食べるエネルギーが高まってくるのを待たためだった。

その後、来所する度にM子はさまざまの不安を語った。

季節が夏に近づいた。

夏休みに入ると地域の子ども会同士のドッジボールの試合がある。全員参加が建前なので出なくてはならない。だけど、自分のせいでチームが敗けたらどうしようと、一日中気になってしょうがないと語り始めた。私は、カウンセリングと並行して、私と二人だけのドッジボールを行った。

M子のドッジボールは、本人が言うほど下手ではなかった。彼女より下手な子はいくらでも居そうな

感じだった。小柄な割には速く強い球を投げるし、正面にきたボールはほとんど受け留めた。だが、私は「上手じゃないか」とか「決して下手じゃない」とは言わなかった。M子が自分は下手だと言っている。そのM子の言葉を否定するようなことは決して言わないのが私流儀だ。

カウンセリングもドッジボールもずっと続いた。ただ、お盆の頃少し中断した。

再び来所するようになってから、M子はドッジボールのことを二度と口にしなかった。私も訊かなかった。彼女が口にしないのは、うまくいった証だと思った。M子はいつも不安を口にするが、成功体験は口にしない。ある意味では、志が高いとも言える。オリンピックの金メダルをめざしている人に、国体での優勝を褒めても意味がない。むしろ、褒めると志の高さが解らない凡人と見なされる恐れもある。

秋になって、一旦、相談を終了した。拒食、不安という神経症状が消えたからである。

しかし、翌年春、母親から電話が来た。

夜中にM子が母親の所に来て、泣きながら不安を訴える、と言う。しかも、その不安が、何か具体的なことに対する不安ではなく、ただ不安だ、という。そういう夜がずっと続いているということだった。

私は、すぐにM子を連れて来るように、また、M子の来所時間とは別の時間、母親とのカウンセリングをしたから、時間を考えて欲しいと伝えた。電話を切ったとたん、後悔の念が私の心に沸いた。M

子が生後数ヶ月の時、最初に母親が訪れた時、あの時から母親とのカウンセリングを始めるべきだった、と。

生後数ヶ月のM子を見てくれと訪れて来たあの時、母親は心中にさまざまな不安を抱えていたはずだった。だが、経験未熟の私は、つい、うかうかとM子だけを見て、M子を差し出した母親の心を見ようとしなかった。そのことを後悔したのである。

母親とのカウンセリングは、はじめは中々進まなかった。彼女が心の外側のところだけを話していて、内側に眼が向かわなかったからだだった。

だが、母親が次のような話をしたこと、一歩先に進むことができた。

中学二年の時、顔に腫瘍ができた。男子から「お岩さん」などとかかわれ、恥ずかしくてたまらなかったが、自分の母親に「病院に連れてって」と言えなかった、と。この時彼女は笑顔で話していた。

すかさず、私は母親に言った。

「私を、あなたのお母さんに見たてて、今、ここで、お母さん、私を病院に連れてってと、はっきり声を出して言ってみてください」

とたんに母親の顔が緊張した。口を開こうと努めているようにも見えたが、口は閉じたままだった。やがて両眼から涙があふれ出し、頬を伝って滴り落ちた。

この日のカウンセリングは、これで終わった。

夜、自宅に電話がかかってきた。M子の母親からだ。私は、深刻な内容を抱えているクライアントには、自宅の電話番号を告げていた。

「カウンセリングの時、先生が、母に言うように言ってみるとおっしゃいましたが、どうしても、声に出して言えませんでした。口に出して言うと、母とのきずなが永久に切れてしまいそうな不安がこみあげてきました。

でも、家に帰ってからしばらくすると、無性に母と話したくなってきました。家に電話して、久しぶりに母と一時間も話してしまいました。とりとめない雑談でしたが、それでも今、心がとても軽くなって、話してよかったと思っています」

母親自身その母親との心の絆が細く、本音を言うと絆が切れてしまうのではないかという不安を心の奥の方に秘めていたことがわかった。

その後のカウンセリングで、彼女は次のように語った。

「結婚してこの市に来て社宅に住むようになりましたが、昼は孤独で、家の中に居たたまれず、生まれて間もないM子が眠っているのをいいことに、車であてどのないドライブをして戻ったら、M子が火

が付いたように泣いていたことがありました」

しかも、このようなことがたびたびあったという。

乳児にとって、母親から見棄てられることは、即、死を意味する。この場合、母親は完全にM子を見捨てた訳ではないが、M子は、母親の顔を見るまでは、見捨てられた恐怖不安にさいなまれていたはずである。乳児のこの時の強烈な恐怖不安は、後年、記憶として再生できるものではないが、心の中には、しっかりと刻み込まれる。

拒食をはじめとして、M子が持つさまざまな不安は、この乳児時代、心に刻み込まれた恐怖不安が、火山のように、何かきっかけがあると表に吹き出していたのだった。

当時、彼女は育児の責任に挫けそうになっていたのだろう。それ以前に、毎日ひとりぼっちで永い一日を過ごさなければならず、淋しく、心細く、人恋しく、自分を持って余していたのだろう。

新婚早々とはいえ、当時の幹部候補生社員は、早朝から深夜まで、重い仕事上の課題を課せられて悪戦苦闘していたのである。家庭や妻のことを思いやるゆとりなど、なかったはずである。それが高度成長期の男たちの現実だった。家事育児の夫婦分担などという発想が浮かぶ余地はどこにも無かった。夫は食事も睡眠も大急ぎで済ませて仕事に専念する一方、妻は、家事のほか、時間が有り余っていたのだから。サラリーマンの妻には、外に出て働くという発想すらなかった時代だった。

だが、当時でも、冷蔵庫、洗濯機、掃除機が各家庭に普及し、それがなかった時代のように、一日中炊事、掃除、洗濯に追われるという時代でもなくなっていた。そこで、サラリーマンの妻にとって、大きなジレンマが生じた。何もすることのない時間が、突然たっぷりと生まれてしまったことである。多くの妻が、この時間を持て余した。それが、妻たちの心を蝕んだ。

当時、私は、不覚にも、そのことに気づいていなかった。教育相談を始めたばかりの未熟さのせいもあつたが。

母親とのカウンセリングを進める一方、M子とのカウンセリングも進めていた。

今度もM子は休みなく語った。だが、一年前と違うのは、泣きながら語り続けた点だった。しかも、私に近づいてきて、私の体にもたれかかってきた。私は、しっかりと抱き締めた。乳幼児期、M子は母親にしっかりと抱いていて欲しかったのだろう。遅まきながら、私を当時の母親がわりにして、M子は望みを果たそうとしているのである。とは言え、乳幼児期のそうして欲しい時、母親に抱き締められる埋め合わせを完全にできる訳ではない。完全どころか、ほんの何分の一、いや何十分の一、何百分の一という程度にすぎない。

それでも、二、三ヶ月も経つと、M子はだんだん泣かなくなり、やがて、他のことをするようになっていった。

彼女は、美術に強い関心を持っていて、いろいろなものを創作した。材料はありふれた画用紙や千代紙やクレヨンなどだった。

ある時、自画像を描いた。小学五年生の女の子と言えば、たいていが、少女雑誌の表紙の美少女の似顔絵か、リカちゃん人形を描いていたが、M子の絵は違っていた。心の闇を表現した陰影のある味わい深い絵だった。二、三十分で、画用紙にクレパスで書いた、デッサン程度の小品だが、私は、美術品だと感じた。

人はよく、子どもの描いた絵を見ると「上手だね」と褒める。だが、私は八十数年の生涯の中で、「上手だね」と言ったことは一度もない。技術の巧拙ではなく、その子が表現しようとする心を共感しようとして、内面に話題を向ける。この時も、絵に現れた内面についてM子と話し合った。

M子の来所は、小学校卒業まで続いた。

不安を訴えることはもう無くなっていた。

六年生の一年間は、専ら私とドッジボールとか、体育的なことをして過ごした。苦手を克服したいという強い志向の現れと、私は受け取っていた。

M子の母親とのカウンセリングをいつまで続けたか、今は思い出せない。

中学に入ると、来所することはなかったが、M子からときどき便りが来た。その中で、運動能力を高めようとする運動部に入ったが、学年が進むにつれて、下級生にどんどん追い越されていく、素質に恵まれない者の悲哀を綴ったものが、今も記憶に残っている。

高校に入ってから、便りも途絶えた。

だが、一学年の終わり、突然相談室を訪ねてきた。父親の転勤で、東京に移ることになり、高校も決まったということだった。

中学時代は運動部を選んで失敗したので、高校では美術部に入り、楽しい一年を過ごした。転校しても美術を続け、美大を受験するつもりだと語った。

彼女は手土産に、手製のクッキーを持参していた。私との間の机の上に拡げていたが、私が一つ食べるあいだに、立て続けに三つ四つぼりぼりと平らげ、話が終わるころには、全部食べ尽くしていた。

食べながら、「昔、何も食べられない時期があったなんて、嘘のような感じた、今では、肥りすぎが心配だ」などと言っていたのが印象に残った。

数年後、私は東京に移った。

その頃、M子は美大を経て、東京の広告会社で働いていた。

一度、会ったことがある。広告のデザインを担当しているということだった。きびきびし、生き生き
していた。

進路相談 その一

教育相談には、一度だけの相談もある。

三年の女子高生が来た。

高校生までの生徒が、自分から来所することは滅多にない。

大学を受験するのに、医学部にするか、建築工学科の設計専攻にするか、迷っている、と言った。

「小学校に入る前の小さい頃、主に何をして遊んでいましたか？」と私は訊いた。

道端で野花を摘んだり、松ぼっくりを拾っては、部屋の中に飾りつけていた、と答えた。更に、小学校に上がって以後も、それは続き、今でも、よく部屋の模様替えをしては楽しんでいて、とつけ加えた。

「医者になるのか、と思った動機は？」と、私は重ねて訊ねた。

つい先日、祖母が家で倒れた時、往診に来てくれた医師の態度や、処置、治療の手際に深い感銘を受

けて、と彼女は答えた。

私は、彼女が最初に話した言葉から、すでに答えを用意していた。その後の質問は、私の念頭に浮かんだ答えの証拠固めに過ぎない。

初め、彼女は「医学部か、建築工学科の設計か」と言った。設計の方は焦点が絞られているのに、医学の方はそうではなかった。

焦点が絞られているということは、昨日今日思いついたものではなく、永い年月の間に徐々に志望が固まってきたことを示している。案の定、医学の方は、つい先日の体験に過ぎない。

幼児が物事に熱中している時、報酬という観念は毛頭無い。自発的な欲求に駆られてしているのである。この内発的な欲求は、その人の本性さがから発するもので、金銭、名声、地位、名誉などという他の動機によるものより、ずっと強く、しかも、楽しみながら一生続くものである。

ある時、強く受けた感銘も、確かに物事をなす動機に充分成り得る。だが、一生のうちには、飽きたり、初めの頃の情熱が次第に冷めてきたりはしないだろうか。それでも、医師になれば、医師の仕事を続けてはいくだろう。だが、情熱を失った医師は、医師自身にとっても、また、その医師の診察を受ける患者にも不幸なことである。

これは、弁護士や教師、看護師、あるいは一般行政職の公務員にも当てはまる。政治家の場合は、国

民の大半が迷惑する。

公共の仕事に就く者には情熱が必要である。さもないと、多くの人が得られるはずの公共の利益を得られない結果となる。

彼女の問いに対する私の答えは、おのずから明らかだった。

数年後、一冊の雑誌が私の手許に届いた。

開いてみると、見開き四ページにわたって、建築デザインの新人賞を受賞した若い女性の紹介記事と写真が目に入った。彼女だった。

その後、彼女の活動は更に発展して海外の仕事も多く受けるようになっていき、海外の賞もいくつか受賞した。

昨今、私も医師の診療を受ける機会が多くなった。そんな時、ふと、彼女が医師になって私の主治医を引き受けてくれたらと思うことがある。彼女の人並み優れた才能をもってすれば、医師になっても、そうとうの医師になっていたに違いない。

だが、これは、あくまでも私の個人的都合にすぎない。

進路相談 その二

あの女子高生が進路相談に来てから二、三年後、高三男子が一人で相談に来た。

大学を受験するに当たって、学部学科が決められないという。

例によって私は訊ねた。

「小学校にも上がらない幼年時代、主に何をして遊んでいましたか？」

泥こねをして遊んでいたという。小学校に上がってからも、それは続いた、と付け加えた。

「泥こねの延長線上に、君が選択する学部学科があります」と私は言った。だが、私にも、それが、どんな学部のような学科か、見当がつかなかった。

「ハア」と言いながら、男子生徒は首を傾げて考え込んでいた。

「陶芸」という言葉が浮かび、私は口に出してみた。だが、陶芸家になるには、大学に入るより、その道の名人の所に弟子入りする方が早道の方である。

次いで「モルタル職人」という言葉が浮かんだ。だが、これもその気になれば、すぐにモルタル工事を手がけている所に就職すればよい。なかなか大学と結びつかなかった。

高校生も考えていたが、なかなか具体的な答えが浮かばず、けっきょく不得要領のまま、彼は帰った。

数年過ぎた頃、ひょっこり彼が現れた。

「今、大学院でコンクリートの研究をしています」

コンクリートか！ と私は、ハタと思いついた気がした。たしかに、コンクリートは、セメントに砂や小石を混ぜ、水でこねて造る。私の知っている昔の一般的なコンクリートはそれだけだが、特別に強度の硬いコンクリートとか、特別に早く乾くコンクリートを作ろうと思えば、やはり、専門的な知識や実験や研究が必要になるだろう。文明の発達に伴って、様々な用途に適合する特殊なコンクリートの需要が、ますます増大することは間違いない。いいところに目をつけた、と私は思い、彼に告げた。

それからまた、何年かして、日本でも一、二を争う大手土建会社に就職し、コンクリートの研究開発を続けている、という知らせが届いた。

学校の紹介を経ずに、自分で調べて、独りで来所する生徒は、相当に能力の高い生徒のようである。

当時の高校の進路相談では、「君の学力なら、B大学のA学部なら八〇%の合格可能性、A大学のB学部なら三〇%」で終わることが多かったようだ。

だが、あくまでも自分の特性を活かせる進路の選択を心の奥深くから望み、諦めず探し続ける生徒は、それでは満足せず、自分で教育相談機関を探し、訪ねて来たようだった。

放課後の算数

小学校の教師から電話がかかってきた。若い男の声だった。

六年生を担当しているが、学級の中に、盗み、万引きを繰り返す児童が居て、困惑している。どう指導したらよいだろうか？という内容だった。母子家庭で、母は働きに出ており、子どもを連れて教育研究所に通える状態ではない、という。

私は、その子の算数の学力がどの段階にあるかを訊ねた。

男性教師は、私の唐突な質問に戸惑った様子だったが、それでも、その児童の現在の算数の学力の段階を答えてくれた。

「これからすぐ、その子に合う算数の教材をひと月分くらいまとめて送ります。

毎日一枚、放課後その子独りだけを残してやらせてください。

その時、必ず先生は傍に居るようにしてください。

また、赤鉛筆か赤ボールペンを、いつも持っていてください。

子どもが一問計算を終わって、答えが正しければ、すぐに赤丸をつけてください。もし間違っていたら、決してバツはつけず、もう一度考えてごらん、と言って、消しゴムで消して白紙に戻してください。そして正解が出た時、赤丸をつけてください。

一枚に八問から十問あります。その子のできるはずの問題ですから、全部やり終わるのにそんな時間がかからないでしょう。

全部正解になったら、大きく赤で100と書いてその子に渡してください。言葉はあまり要りません」

電話の主は何となく要領を得ない感じの返事をして電話を切ったが、この教師は私が言ったようにやってくれる、という直感が私の中にあった。

早速、教材のコピーに取りかかった。

実は、盗癖がある子等の為に、かねてから小学一年から六年までの算数のすべての段階の問題用紙を何年もかけて作成し、段階別に分けて書架に収納していたのである。

だから、電話によってその子の算数学力のレベルを訊くと、すぐに問題用紙をコピーすることができた。三十枚ほどコピーして、その日のうちに、市の配送ルートを使って、その学校の担任教師に届けた。

それから毎月、翌年の三月まで、それを続けた。

三月の終わり頃、担任教師が私の許を訪れて来た。

算数教材を与えた子は、あれ以来、卒業まで、一度も盗み、万引きをしなかったそうである。「何故でしょう?」と、その若い男性教師は私に問いかけた。この半年間、彼は、半信半疑のまま、私の送る教材を使っていたことになる。

「盗みや万引きを繰り返す子どものほとんどが、金や物が欲しくて盗るんじゃないんです。本当に欲しいのは、人が自分を振り向いてくれること、近づいてきてくれること、つまり、自分という存在を他人が承認してくれることなんです。」

この子は、母子家庭で育ち、母親は仕事に出ていると聞きました。おそらく、幼い頃から、独りでいることが多かったのでしょう。

私知知っている、やはり万引きをくり返す子も母子家庭でした。その子は、店で消しゴムを一掴み、チョコレートを一掴みと盗んで来ると、クラスの子どもたちに、ばらまくんです。すると、子どもたちが寄ってくる。一時、自分が人気者になった気分で満足する。しかし、永くは続かない。すぐクラスの子どもは離れてしまう。そこでまた、盗んできて配り、一瞬の満足感に浸る、その繰り返しなんです。

先生が、その子を毎日残して教材を与え、できると赤丸をつけて百点を与える。子どもにとっては、先生は特別に自分に目をかけてくれ、教材まで与えてくれて、しかも、できると丸がついて百点をくれる。自分は先生に認められ、特別に優遇されているという充足感を毎日感じる。だから、盗みをする心

理的動機が生まれなかったのです」

「そうすると、あの子は、もう一生盗みはしないということですか？」

「そうとは限りません。中学、また、その後の人生で孤独感が続くと、また、盗み始めるかもしれません。誰か、心を満たしてくれる人に出会えれば、しないでしよう。」

成長するにつれ、盗みの動機も徐々に変わっていきます。盗品を配ろうとしても、子どもの時のように、無邪気に受け取ってもらえなくなります。そうになると、単に収入を得る為とか、独りぼっちの自分という存在を他人にアピールする為に盗むということになります。これも、自己満足にすぎませんが、昔は、空巢や泥棒が金品を盗んだ後、部屋や廊下に大小便を残していったという話を聞いたことがあります。これも、自分の分身を残していくことで、我ここに在りと、自分という存在を知らしめようという潜在意識からでしょう。

また、まわりから爪弾きされている人が暴力団に入りやすいのも、厳格な縦社会で、ひどい目に合うことはあっても、仲間内の連帯感が、それなりに得られるからでしょう」

若い男性教師は、納得したというふうに頷いて去った。

これは、私が退職する前年の話である。その後、この子がどうしているかは聞いていない。

ジャズレコードをくれた青年

これより十数年前、当時親しくしていたある中学教師から電話が来た。

何年か前の教え子から電話が来て、「死のうと思つて睡眠薬を一びん飲んだが、飲んでから急に怖く
なつて先生に電話した。今、家族は皆出かけていて独りだ」というので、すぐ車でその元生徒の家に駆
けつけ、近くの病院に運び入れ、命はとりとめたが、このままで何もしないのは心配だ。何とかその教
え子の心を救ってもらえないだろうか、という依頼だった。

退院したら、すぐ私の所に来るようにその教え子に話してくれるよう、私は頼んだ。

ほどなく、その教え子は来た。たしか、十九歳だったと思う。少年と青年の狭間という感じだった。

彼は、次のように話した。

「親父が非常に口うるさくて、学校に上がる前から、座り方から箸の持ち方、茶碗の持ち方まで、い

ちいちうるさく言い続け、次第に親父が居ると食物が喉を通らなくなり、やがて、家族の食事が始まる前、独りで食事を済ませたり、自分の分だけ取り分けて、部屋に運んで独りで食べたりのようになるました。

学校に入って給食が始まると、人が大勢居る教室では、食べものが喉につかえて通りませんでした。しかし先生は、食べろと言う。だけど、食べようとしても、どうしても食べものが喉を通らない。先生は、好き嫌いはいけないと叱りましたが、べつに好き嫌いで食べない訳じゃない。そのうち給食の時間が怖くなって、お腹が痛いと言っ、保健室のベッドで給食の時間だけ逃げたりもしました。

そのうち、だんだん教室に居ること自体が苦痛になってきて、授業が始まっても教室に入らず、校庭の隅の砂場で何か造ったり、絵を描いて遊んだりするようになります。でも、どこかの教室から、皆が歌を唱ったり、先生が何か言っている声が聞こえてくる場合があります。そういう声が入ると、自分が凄く孤独で、みじめだという気持ちになり、家に戻ってしまいました。家に独りで居る方が、よっぽど気が楽でした。

ぼくが学校を早退したり、行かなかつたりすることがされると、親父が凄く怒りました。ぼくを殴りました。怒られると、凄く怖かったけれど、すこし経つと、チキシヨウ！ という気持ちになって、親父の財布から金を盗みました。それがばれると親父はもっと殴る。その時はとても怖いけれど、そのあとで、コンチキシヨウ！ 仕返ししてやる！ という気持ちになってもっと盗みました。そんなことを

繰り返しているうちに、親父が財布を隠してしまい盗めなくなってしまいました。そこで僕はよその家に空巢に入ったり、店で万引きするようになりました。

やがて捕まり補導されました。親父は猛烈に怒りましたが、僕は盗みをやめませんでした。家に親父と一緒に住んでいるより、少年院の方がいいかもしれないと思ったこともあります。でも、大勢で一緒に食事することを考えると、少年院も嫌でした。だんだん盗みが上手くなって、捕まらなくなりました。親父も諦めたのか、偶然顔が合っても、黙って僕を無視しました。僕も親父を無視しました。

中学へもあまり行かなかったけど、卒業証書はくれました。

それからずっと家でジャズのレコードを聴いて日々を送ってきました。

少し前、近くの人が家に来て、旅行を僕に勧めました。母も乗り気になって、費用は母が何とかすると言いました。母は、いつも親父の顔色ばかりうかがって、おどおどと惨めな顔で暮らしている人ですが、親父が居ない時は菓子や果物を持って僕の部屋に来ることがあります。僕は、母が嫌いではありませんが、親父に無抵抗で服従だけしている奴隷みたいな母を情けないなと軽蔑することもあります。

僕は、遠足も修学旅行も一度も行ったことはありません。ふと、旅行もいいかなと思って、出かけました。

でも、列車の中でも街の中でも、僕と同じ年くらいの奴が彼女を連れていたり、何人かの仲間が楽しそうに談笑したりしている姿が目に入ると、学校へも行けず、友だちも、まして彼女など無く、いつも

独りで狭い部屋に閉じこもって、レコードだけを頼って、ただ時間だけを過ごしている自分が、どんなに孤独で、みじめで、情けない人間かを、ありありと見せつけられるような気がしました。

すぐ家に戻りました。でも戻っても、前に家に居た自分に戻れませんでした。旅行で目にした、ペアになったり、家族で仲良くしていたり、仲間と楽しそうに談笑したりしている姿が、頭から離れませんでした。旅行中よりもっと、自分が独りぼっちで、淋しくて、惨めで、情けない人間に感じられてきて、居たたまれない気分になって、薬局に行って睡眠薬を買いました。

でも、すぐに飲もうというつもりではありませんでした。親父や母、特に親父が家に居て、倒れている僕を見つけて「ザアマミロ！」と思われのがシャクで、飲みませんでした。

それが何日か前、親類の法事とかで、両親が泊りがけで出かけて、僕独りになりました。飲むなら今しかないと思って、全部飲みました。少しすると頭がもうろうとしてきて、ああ、これで死ぬんだと思った途端「死ぬのは嫌だ！ 僕はまだ何もしていない！」という思いが、猛烈に吹き上げてきて、その時、中学の時、ただ一人、良くしてくれた先生が浮かんできて、電話しました。その後のことは覚えていません。

病院で治療を受け、退院する時、また、その先生が迎えに来てくれました。車の中で、先生がこのことを話し、ぜひ行ってみろと言いました。その先生だけは信用していたので、ここに来ました」

こう書くと、これだけのことを彼が一気に話したと受け取られるかもしれない。だが、実際は、何回かの来所を通してポツリポツリと語った内容を私がまとめて書いたものである。

世間には、孤独そうに見える人や、永いこと落ち込んでいる人を見ると、旅行を勧める人がよく居る。勧める本人は、善意、好意からと思っっているようだが、実はこれは、自殺を考えている人に、青酸カリや実弾入りの拳銃を手渡すのにも似た、危険な行為なのである。

孤独な人や、心が沈み続けている人は、たいてい自室に引きこもっている。旅行に行き、仲間同士、友だち同士、恋人同士、家族ぐるみ、楽しそうに、仲睦まじそうに、幸せそうに、生き生きと充実して生きているように見えるその人たちを眼のあたりにした時、何かの事故で、顔の大部分が損傷し変形した人が、初めて鏡で、別人の顔になった自分の顔を見て、強烈なショック、絶望、落胆、生きる意欲の喪失に見舞われるのと同じような心理的状态に落ち込むのである。孤独に日々を過ごしている人は、他人の姿を鏡にして、自分の姿がはっきり見えてくる。

改めて客観的に、はっきり見えた自分の姿が、本人にとって、誇れる姿であればいいが、その正反対の姿だった場合、あなただったらどう感じるだろうか。

旅行中、あるいは旅行から戻った直後に自殺を図る人が、わりあい多いのである。そして、自殺行為をした人の、ごく低いパーセンテージに入る人が死んでいる。ということは、自殺行為を試みたものの、

死にきれなかった人の割合が圧倒的に多い、ということになる。

一度は自殺を試みたという人が、あなたの身近に居るかもしれない。あるいは、あなた自身かもしれない。

ある時、彼は一枚のレコードを持参して、私の前に現れた。

「今日は、これを僕と一緒に聴いてください」

私たちは遊戯室に移動して、棚の上のプレイヤーでレコードをかけた。

ジャズは、ハリウッド映画の中でなら、断片的に聴いたことはあったが、一曲まるごと聴くのは私には初めてのことであった。

私たちは床の上にあぐらをかいて聴いた。

三、四十分の曲だった。

終わると、「どうですか？」と彼が訊ねた。

「レコードから伝わってくる音波が、僕の腸を刺激して、音楽が鳴り続けているあいだ、僕は腸の蠕動運動をはっきり感じ続けていました。音楽が終わったとたん、蠕動運動も止まりました。初めての経験です。この音楽は内臓を刺激する音楽だと感じました」

「ふうーん？」と、彼はしばらく黙り込んでから、

「今のような感想は、今まで僕が読んだ雑誌のどこにも載っていませんでした。なんか、新鮮な感じがします。」

このレコードは、僕が持っているレコードの中で、いちばん大切なレコードです。

でも、僕のレコードを、先生のように真剣に聴いてくれた人は、はじめてです。

これを上げます。大切にしてください」

私は、このレコードを何回も聴きたいとは思わなかった。だが、一番大切なレコードをくれようとする彼の心を受け取る証しとしてレコードを受け取った。

腹中の感覚に全意識を集中し続けるのは、ちょうどこの頃、私の、カウンセリング中のクライアントの話の聴き方の基本的スタンスになりつつあった。それから数年後に、私独特のスタイルとして、私の内部に定着した。世界で、ただ一人かもしれない。

はじめ、私はカール・R・ロジャーズ博士の著書からカウンセリングを学んだ。その後、日本ではトップクラスと言われている五人の先達から教育カウンセリングを受け、日本各地の合宿研究所に参加して学んだ。その間、次第に、私にもカウンセリングを実践する機会が与えられ、次第に経験が重なってきた。

この時は、はじめてカウンセリングの本を読んだ時から十数年経っていた。

その後、来所するたびに、彼はジャズについて語った。ジャズの創生から、中興、そして現在のジャズに至る流れ、その間に活躍した演奏家たちの物語り、彼のもっとも得意の分野だったのだろう。数年間ジャズ漬けの日々を過ごしているうちに、ジャズのすべてを紹介できるほど、多くの知識が彼の脳中に定着したのだろう。

ある時、彼は次のように言った。

「カウンセリングはジャズに似ています。ジャズは、一緒に演奏する人が互いに出す音を聴き合いながら、即興でハーモニーさせて曲を創り上げていきます。カウンセリングも即興でハーモニーを創っています。だから僕はカウンセリングが好きです」

即興でハーモニー、言い得て妙だと私は感じた。彼は短い間にカウンセリングの核心を感得していた。

夏になった。

私は、夏休み中に、当時来所していた子どもたちの中で、より集団生活に慣れるといいと思っていた子どもたち、小学校中学年から中学生まで十数人と、三泊四日の合宿を試みた。

私一人では全部の子に目が行き届きかねるので、心理療法を勉強中の大学生にも声をかけ、応援に求められた。さらに、地元の福祉ボランティアの青年たちにも協力を求めた。そのボランティアの中に、彼を誘ってみた。彼は承知した。

合宿の最中、彼はなんとか皆と一緒に食事ができたようだった。また、ボランティアの青年たちの輪の中にも入れたようだった。ただ「トイレに誰かが居ると、小便が出ません」と、そっと、私に話したことがあった。だが、彼は生き生きしていた。

私は、さらに名古屋で開かれた合宿のカウンセリング研究会にも彼を誘った。彼は、行きたいが、金が無い、と言った。父親とは口も利きたくないし、母親にも、前に旅行から帰った直後に自殺を図り、迷惑をかけたことから、言いくいと云った。費用は私が出すことにした。

名古屋でも、彼は充実した表情をしていた。

その後も、地元で開かれる同種の会に誘い、地元でカウンセリングを研究し、実践している人達を引き合わせた。

さらに、顔見知りの県青年団団長にも引き合わせ、同団長が主催している種々の会合にも彼を同伴した。私は、何となく、その集まりの顧問のようになっていた。何となく、というのは、改めて顧問を依頼された訳でもなく、参加を要請されても、交通費はもちろん、何らの報酬も出されなかったからである。団長自身が、家業は奥さんに任せきりで、ボランティアで東奔西走している人で、もともと、銭

勘定の感覚が欠落しているのではないか、と思いたくなるような人だった。

土曜日の午後毎週開かれる集まりに私と共に通ううちに、彼は農村の青年たちに受け容れられ、会合以外でもつき合いが始まっていた。

しばらくすると、誰かの紹介でもあったのか、他市の商店で働くようになり、私から離れていった。

何年か経ってから、私がふと目にした新聞の社会面の片隅に、忘れものに気がついて出先から家に戻ったら空き巣が居て、ナイフを出したので、格闘になり取り押しさえた。裁判で一年の懲役刑が決まったという記事が目に入った。その空き巣の名が、彼だった。

一年半ほど経った頃、私の前にフラッと彼が現れた。頭が坊主になり、妙に青白い顔をしていた。

一年の刑期も終わりに近づいた頃、日頃から彼を目の仇のように当たっていた同室の男に、特にしつこく絡まれ、堪忍袋の緒が切れて取っ組み合いになってしまい、その罰として、刑期が半年延び、ようやく刑務所から家に戻ったばかりだと言った。

六人の同室者たちの輪の中に入れず、看守たちにもなじめず、苦しい一年半だったという。

カウンセリング、人間関係研究会への参加、青年ボランティアグループへの参加、青年団への参加と、

また、同じプロセスをくり返した。更に、都会の青年たちと交われる場があればなお良いのだが、それは私のテリトリーの中には無かった。

二、三年すると、彼は再び職を見つけて、私の前から去って行った。

この経験から、孤独から盗みを繰り返す人にとって、一時的な人間関係は一時的な犯罪抑止力を有するが、半永久的な抑止効果は期待できず、心が充分安定するまで（おそらく何十年）安定した人間関係環境を提供する必要があることを知ったのだが、個人としての私の限界も知った。

かと言って、法的制度を設けたとしても、やはり無理だろう。制度は、常に最大公約数を基に設定される。しかし、人間ほど最大公約数の範囲に収まらないものはない。制度下では、いつも、どこか足りなかったり、余計だったりするのである。

彼は、出所後に義務づけられた、ある公的立場の人に会いに行っている話をしたことがある。

「行く度に、いつも決まった質問をされ、僕も決まった答えをして、後は気まずい沈黙があるだけで、行くのが嫌でたまりません」

すべての出所者が、彼のようにだろうと言うつもりはない。人には相性というものがある。だが、法は相性までは組み込んでいない。

出所後も会いに行ける人が居て、心の安らぎを得られた前科者も居ただろうとも思う。

だが、法で義務づけられた訪問が苦痛というのは、前科者に悪影響を与える。もともと人間関係で苦汁を飲まされてきた者に、更に苦汁を飲むことを義務づけ、違反すれば罰を課するという法は、指定された人物に会うのが苦痛になった人の再犯率を高める逆効果を生む。

法も功罪相半ば、なのである。

縁側で独りジャムパンをかじる男児

私が、市教育委員会の職員として、教育相談を行ったのは、一九六四年から一九八七年の二十三年間である。

そのうち、はじめの五年間は、生徒指導、教育相談、特殊教育担当の指導主事兼市青少年センターのカウンセラーとして、後の十八年間は市教育研究所の教育相談担当としてだった。

この一九六四年から一九八七年の時代というのは、東京オリンピックに始まる高度経済成長期と、その余勢を駆ってのバブル形成期の時代に当たり、その後のバブル崩壊とそのあとに続く永い経済停滞期を経てきた二〇一七年現在の社会、家庭、学校、子どもと、いろいろ違うところがあるかもしれない。

人は、育つ過程で、時代から多大な影響を受けるものである。

私が生徒指導担当の指導主事になってまもなくだった。

小学校の校長が指導室に私を訪ねてきた。

この年入学した一年生の男児が、家庭で、虐待されている疑いがあるという。

母はこの男児を連れて再婚したばかりだが、再婚相手がこの男児を受け容れないのか、食事も男児独り縁側でパンなどをかじっているという。夫婦と夫の連れ子の三、四才の女兒は部屋の中で団らんしているらしく、調べて欲しい、という依頼だった。

さっそく、私はその家に行ってみることにした。ただ、両親共働きに出ているという話で、訪問は夜まで待たなければならなかった。

校長から渡された手書きの略図を頼りに、幹線道路から細い脇道に入った。

一九六四年当時は、今のような防犯灯は整備されておらず、道はまっ暗だった。だが夜は暗いのが当たり前前の時代だった。二十万人余りの人口を持つ市の中心に近いところでもそんなふうだった。

脇道はすぐに竹藪の中に入り、いっそう暗くなった。だが、数十メートル歩くと竹藪を抜け、ひらけた所に出た。そこに、訪ねる家があった。

ちょうど夕食の最中だった。部屋に上がると両親と幼い女の子の三人が食卓を囲んでいた。

小一の男児のことを訊ねると母親が無言で部屋の外を指さした。

縁側で柱にもたれながら小一の男児が独りジャムパンをかじっていた。

私は男児の近くに腰を降ろし、話しかけてみた。

男児は、初対面の大人の男にも怖がるふうはなかった。だが、口数は非常に少なかった。

人なつこくはないが、大人への恐怖心や警戒心もそれほどないようで、表情も特に暗いとか委縮しているようにも見えず、親から虐待されているふうには見えなかった。

ただ、他の家族は揃って食卓を囲み普通の食事をしているのにこの子だけが独り縁側でジャムパンをかじっている、という異様な光景が、私の目の前にある。このことがどうしても不可解だった。

やがて、母親の私を呼ぶ声が聞こえ、私は前の部屋に戻った。食卓は片づけられていて、父親は幼い娘とカルタのようなもので遊んでいた。父親の子に接する態度は優しく、子どもも、のびのびとして無邪気だった。

母親が主に私の相手をした。時々、父親が補足したり、母親の説明を裏付けるような話をした。夫婦の息も合っているようだった。

「お子さんは、どうして独りで居るんでしょう？」

と、私は訊ねてみた。

「あの子が独りになりたがるから」

と、母親が答えた。

「独りになりたがるのは、どうして？」

と、私は訊いたが、母親の答えの中に納得できるものはなかった。

だが、これ以上粘ってみても真相に辿りつけるとは思えなかったので、一旦、この家を辞すことにし、別の角度から調べるしかないなと思いながら、帰途についた。

まっ暗な竹藪の中の道に入った頃、後ろから私を呼ぶ声と走ってくる足音が聞こえて、私は立ち停まった。

声の主は、今しがた訪ねたばかりの家の母親だった。

「先生と二人きりでお話したかったので、あの時は黙っていました」という前置きの後に、彼女が話した内容は次のようなものだった。

七年前、彼女は夫を殺した。

夫は酒乱で、飲むと酔って暴れ出し、彼女に暴行した。

また、家から有り金すべてを持ち出して飲み尽くし、更に、妻に酒を求めて来るよう強要した。断ると、暴力の嵐が襲ってきた。

ある日、そのような暴力の最中、彼女は遂に堪え兼ねて、台所の包丁を取り、刺し殺した。

彼女は自首し、刑務所に入った。

入所中男児が生まれた。

男児は施設に預けられた。

やがて、刑期が終わり、出所した。

就職した先で、今の夫と出会い、世帯を持った。

夫の勧めで、施設から息子を引き取った。

小学校入学直前だった。

同じ家の中で暮らしてみると、息子の顔に殺した夫の顔が重なってきた。

堪えられなくなった。

顔を見たくなさに部屋の外に出した。

そして、彼女は、

「しかし、もう、このままでは、いけないと思う。近いうちに解決のメドをつけたい。だから、もう少し待ってくれませんか。決して嘘は申しません」と言った。

私は、彼女の声の響きから、彼女が本心を語っていると受け取った。

嘘か本心か、言葉ではなく声の響きに現れる、と私は思っている。

私は承諾し、竹藪の中で別れた。

この訪問先でのいきさつは、私は学校に連絡しなかった。

秘密にして欲しい、という母親との約束を守ったのである。

少し時間を置いて、再び、あの竹藪の奥の一軒家を訪ねるつもりでいた。

しかし、数日後、学校の方から報告がきた。

「男児を施設に預けて一家は姿を消しました」と。

「そうですか」

私はそれだけ答えて受話器を置いた。

家庭訪問はこの後数多く行ったが、五十年以上を経た今、あまり詳しくは覚えていない。今もはっきりと思い出せる事例だけを以下に記そうと思う。

酒びん持参の家庭訪問

中学校からの連絡で、「中二の男子が登校しない。担任教師が訪問すると、家事をしている。母親が家を出て、父親が長男に家事をやらせているらしい。父親は夜にならないと帰宅しないので、会ったことがない」ということだった。

義務教育の年令にある少年が、親の命令で学校を休まされているとなると、法で定める「就学の義務」に違反することになる。

因みに、義務教育の「義務」とは小、中学生に課されたものではない。未成年の彼等は法律上のいかなる義務も負うことはない。

「義務」とは、保護者が子どもを就学させる義務を負う、という意味である。

このことを敢えて書くのは、親ばかりでなく、しばしば教師も誤って解していて、不登校の児童、生徒に「登校するのが義務だから」などと説得している例が多数あったからである。あるいは、嘘を承知で、説得の方便として「義務」という言葉を持ち出した例もあったかもしれないが、いずれにしても児童、生徒に言うべき言葉ではない。

私は、まず日中に訪問した。中二の男子は洗濯をしていた。ほかに小学生らしい子が二人、それぞれ家の中の掃除をしていた。

母親のことを訊くと、「どこにいるかわからない」という答えだった。それだけ聞いて私はすぐ職場に戻った。

保護者が居ないことを承知の上で私が家庭に出向いたのは二つの理由があった。

一つは、親に会う前に子どもたちの実状を知っておきたいと思ったからである。

二つめは、街灯の無い当時、真っ暗な街で初めての家を探し当てるのがいかに難しいか経験上知っていたからである。当時は表札の無い家も多かった。昔からこの地に住んでいる人たちは、誰がどこに住んでいるか互いによく分かっている。昼なら人に訊いて教えてもらうことができる。夜は人通りも無く訊く人も見当たらない。昼のうちに家を知っておきたかったのである。

夜になった。

私はゆっくりと外食で夕飯を済ませ、店に入って清酒一びんと貝柱などつまみを何種か、それにチヨコレート、せんべい、その他の菓子を買ひ昼間訪ねた家をもう一度訪ねた。

父親は家に戻っていた。

初めに迎えに出て来た長男に菓子の入った袋を渡し、「皆で食べてくれ」と言つて私は勝手に上がり込んだ。

居間で、父親が何をするでもなく独りでぼんやり座っていた。

私は名刺を渡し、

「二人で飲みましょう」

と言つて父親の向かいに座り、酒びんとつまみを二人の間に置いた。

湯飲み茶碗を二つ借り、二つに等分に酒を注ぎ、一つを父親に勧めた。

父親はただ呆気にとられたような顔をしていた。

しかし、酒がすすむにつれ口がほぐれてきた。

妻が男と駆け落ちし、残された三人の子どもと途方に暮れたこと、口惜しさと寂しさと生きる張り合
いを失くして、しかし、子どもたちに食わせる為に仕事だけは続けているが抜け殻のような毎日を送っ
ていることなど……。

私は、ただ「うん」とか「ハイ」とか応えるだけで他は一言も口を挟まなかった。

酒もあらかた飲み尽くし話も途切れたところで、

「今日は突然お邪魔して失礼しました。また伺います」

と、私が言って立とうとした時、

「子どもを休ませて申し訳なかった。子どもを学校に行かせなければならぬことは重々承知している
が、家事が溜まるのでつい子どもを当てにしまった。明日から子どもは学校に出すから堪忍してく
ださい」

と父親が頭を下げた。

私は、

「そうしていただければありがたい」とだけ言って、その家を辞した。

まもなく、学校から「子どもが登校しています」という電話連絡を受け取った。

登校できなくなった四年生

小学校から電話が入った。

四年生の女兒が、少し前から登校しなくなった。朝、担任が迎えに行ってもトイレに立てこもって出て来ない。性格は真面目で友人関係も良く、いい子で登校拒否の理由が思い当たらないという。

その日の午後、家庭を訪ねた。その子は元気に遊んでいた。丸い頬が赤い、健康そうな子だった。母親にも会った。どこか悪いところがあるのかと思ひ病院に連れて行ったが、どこも悪くない、と言われたという。

ただ、登校時間が迫るとトイレに入ったきり出て来ず、登校時間が過ぎると出て来て、独りで学習をしたり、テレビを見たりしているが、下校の時間が過ぎると、外に出て活発に遊んでおり、訳がわからないとこぼした。

母親の話から、午後は元気そうだが、朝、特に登校時間の頃は、そうではなさそうだとわかった。私は、自分の眼でくわしく確かめてみたいと思いい、翌朝七時前に訪問することを告げて戻った。

七時前、彼女は洗顔を済ませた直後のようだった。私を見ると、きちんと挨拶した。血色のよい健康そうな顔だった。

その後、彼女はランドセルの中に、その日の学科に合わせて教科書やノートを詰め始め、一度入れたあとも、もう一度確認するというていねいさで、かなり几帳面な性格にも見受けられた。

朝食ができると、育ち盛りの子どもらしく、ご飯を三杯食べた。

それから少しして、登校時間が近づいてきたなと思って見ていると、彼女の顔色が少しずつ変わった。ふっくらした頬の紅色が薄くなっていき、やがて鉛色からドス黒い感じに変わっていった。

私は、その急激な変化に驚いた。

さらに、彼女はソワソワし始めたかと思うとトイレに駆け込んだ。

母親が「この頃、いつも、ああなんです」と言った。

すぐに登校時間となり、近くの子が誘いに来た。母親が、迎えが来たことを告げても、トイレの中は無言のままだった。

あまり待たせては、誘いに来た子が遅れてしまうとと思ったのか、母親が「トイレに入ったまま出て来ないから、もう行ってちょうだい。いつもご免ね」と謝っていた。

登校時間から一時間が過ぎた頃、ようやく彼女はトイレから出て来た。まだ顔色は良くなかったが、それでもトイレに入る前よりは少し良くなっていた。それからさらに一時間経ち、十時を回った頃になると、すっかり元の紅色の顔色に戻り、テレビを観ながら笑ったりしていた。

そこで私は家から出て、母親を外に呼び出し、父親のことを訊ねた。朝から父親の姿が見えなかったからである。

母親は言葉を濁し、詳しく言わなかったが、夫婦間の何かのもつれか、しばらく前から家を出たきり戻らないということだった。

このことが、あるいは子どもの登校への不安の根本的な原因かもしれない、と私は思った。

人間も哺乳動物である。野生の哺乳動物にとって、独り立ちする前に親から置き去りにされることは、即、死を意味する。人間の遺伝子の中には、野生時代のこの不安が刻み込まれているのではないか。

この子の場合、まだ母親は居る。しかし、父親不在の現在、登校中にもし母親も家から去れば、独りぼっちになってしまう。母親から離れられず、家に残っているのではないか。

登校時間前後のあの顔色の変わりようは、彼女の心の葛藤の現れではないのか。真面目で几帳面な性格の彼女は、学校へは行かなければならない、と強く思っている。しかし、どうしても母親から離れる

ことができなくて家を出られない。登校すべきなのに登校しない自分を強く責める心もある。矛盾し合う心が幾重にも重なり合って心神喪失にも近い状態に陥っているのではないか。登校時から時が過ぎていくにつれ、登校しなければ、という義務感や、登校すべきなのに登校しない自責の念が少しずつ薄らいでいき、放課後の時間になれば家から出て、外で遊ぶこともできるようになる。しかし、母親が家から去るのも気がつけない程、家から遠ざかることはない。

こう考えて、朝から昼すぎまでの彼女の様子と、私の推理を担任に伝えた。

だが私は、所詮頭でっかちの未熟者に過ぎなかった。だったらどうするか？ 次の対応が浮かばなかったのである。

扉を開いてもらう

学区が重なる中学校と小学校から、ほぼ同時に連絡が入った。両者が相談してのこと、と思われた。

中学二年生の長女を筆頭に四人の弟妹がいるが、ある時期から五人とも一斉に登校しなくなった。

担任教師が訪問すると、たいていは母親は家に居るが、玄関か勝手口の戸をほんの少しだけ開けて、目だけ覗かせて対応し、決して中には入れないという。その上、家の中を見られるのも嫌っているようで、何か異様な雰囲気を感じるといふ。

子どもたちが登校しない理由は、「行くのを嫌がって」とだけで、五人共一斉に不登校になった理由には一切触れない。

学校への届けでは「母子家庭」となっているが、母親が働きに出ている様子もなく、生計をどう立てているかも不思議、一度、調べてもらえないか、という趣旨だった。

例によって、まず、昼間訪問した。

その家は海に面して見晴らしはいいが、辺りに家が無い一軒家だった。

訪ねると、玄関の戸が細く開いて、男が顔を出した。母子家庭と聞いたが、内縁の夫でもいるのかと思いつつ、名刺を出して訪問の趣旨を述べた。

男は名刺と私の顔や姿全体を調べるような眼で入念に見定めているふうだったが、「母親は居ない、今、外出している」、とだけ、言葉少なに言った。男が、この家とどういう関係にあるのか、ひとことの説明もなかった。

私は、重ねて、子どもたちに会いたい。中に入れてくれないか、と頼んだ。親に無断で中に入れることはできないし、子どもたちも会いたがらない、と、男は言う。

男の態度がひどく硬直していて、しかも、何かをひどく警戒しているような感じが、私の好奇心をそそった。

私は粘った。男と押し問答になった。その間に、家の中の柱の蔭や、ふすまの蔭に、何人もの男が潜み、こちらの様子をうかがっているのに気付いた。

どういう家なのだろう？ と私は不思議に感じた。

男たちは、服装と言いい、表情と言いい、サラリーマンにはとうてい見えず、かと言って、この辺りに居

る漁師にも見えなかった。正体不明という感じだった。

男は、終始、帰ってくれ、の一点張りだった。

このままでは埒があかない、と思い、私は出直そうと思って帰ったが、帰途、妙な家だなという思いが頭から離れなかった。

次に訪問した時、いくらベルを押しても玄関は開かなかった。

しかし、家の奥から子どもたちの声が聞こえてきた。明らかに中で遊んでいるようだった。

私は声を頼りに裏に回って行った。割り合い広い家で二階まであった。

裏に勝手口があり、私は、その戸を叩いた。

戸が開き、小さな男の子の顔が見えた。

「お母さん、居る？」

と、私が問うと、男の子は黙って頷いたので、名刺を渡して、

「お母さんに渡して」と頼んだ。

男の子は終始無言だったが、臆するふうはなく、むしろ、私に好奇心を抱いた様子だった。

室内に、先日の怪しげな男の気配は感じられなかった。

母親が顔を出した。しかし、私の顔を見るや、

「子どもが学校に行きたがりません。何度来ていただいても、無駄です。もう来ないでください」と、切口上で言うなり、ピシヤリと戸を閉めた。

取りつく島がなかった。

だが、怪しげな男たちの姿はなく、母と子だけの、この絶好の機会を逃したくなかった。

私は、ふと目に入った犬小屋に近づいて行った。

そこには、中型の雑種犬が座っていて、私が近づいても吠えもせず、むしろ、私に好奇心を抱いているような感じだった。

私が出すと、犬はすぐに応じてきた。犬小屋から出てきて、私と遊び始めた。犬はそこらを駆け回り、声をあげた。

やがて勝手口の戸が開いた。最初に顔を出した男の子が、また、顔を覗かせた。

私が手招きすると、男の子はすぐ外に出て来て、仲間に入った。二人と一匹の遊びになった。前より、いっそう賑やかになった。騒々しくなったと言うべきだろうか。

するとまた、女の子が顔を出した。そして、仲間に加わった。こうして、いつの間にか、その上の子たちも加わって、人間五人と犬一匹のグループに膨れた。

母親が出て来て、半ば呆れたような、半ば諦めたような顔で「中に入ってください」と言った。

部屋に上がると、私は、すぐにトランプをポケットから出して、皆を誘った。四人の子どもはすぐに集まってきた。母親にも声をかけた。

母親は、私の出方が思いがけなかったのだろう。部屋の中では、私が公務員として、子どもたちの不登校の話を切り出すと覚悟していたのかもしれない。

母親の戸惑い顔を尻目に、私は、皆が見ている中でトランプを切る。それから一枚ずつ配っていく。配る順序は、年令の下の子からだった。

子どもたちに配り終わると、次は母親、最後が私である。

ゲームの種類は、「戦争」を選んだ。

「戦争」という名称は、いかにも血生臭い匂いがするが、やり方は至って簡単で、やり易いゲームである。「ババ抜き」より、もっと簡単で、小さい子や、初めてトランプをする子などとする時に、私がいつも選ぶゲームである。

私が、いきなりトランプゲームに皆を誘い入れたのは、初対面の緊張をほぐす為である。初対面の大人が、すぐに打ち解け合おうとする時、まず、酒を酌み交わすのと同じである。

このようなやり方を、私が誰かに教わった訳ではない。本にも書いてなかった。いわば「自己流」である。

*

脇道に逸れるが、二〇一七年の今のことは知らないが、私が教育相談の仕事に就いた一九六〇年代は、「教育相談」の参考図書や学術的文献は一冊も無かった。私が知らなかっただけかもしれないが、とにかく、私は、手探りで始めるしかなかった。だが、道のない原野だから、好きなように歩くこともできたのである。

もっとも、一冊だけ、あるにはあった。

その頃、文部省が、手引き書として出した冊子が送られてきた。

各教科には「指導要領」というものがあり、毎年、現職の教員を集めては、講習会が行われている。だが、「教育相談」となると、文部省は教育現場に実践を奨励はしているものの、文部省自体に、どのように行うのかの定見がなく、送付されてきた冊子も、それらしい理論を少しと、実践例のようなものを、ごく簡単に紹介しただけのもので、たいして参考になるほどのものではなかった。

要するに、教育現場では各自の創意工夫によって道を造り出せ、というのである。

私は、勘と、運と、偶然だけを頼りに、この仕事を始めたのだった。

だが、この「道の無い所を勝手に歩く」というのが、私は大好きなのである。教職を辞して、この道を選んだのも、「指導要領」で舗装された道路を、指定された方向に向かって歩くよりも、自分がめざした目標に向かって、道無き所を進む方が、私の性に合っているのである。幼い頃からそうだった。大人になってからは、私の生き方は、それしかない、思い定めたのである。

*

本題に戻ろう。

「戦争」というゲームは、各自の持ち札の中から、一枚だけ取って、全員が前に出す。カードには順位がある。ジョーカーが一位、エースが二位、以下キング、クイーン、ジャック、十、九、八……と続く。ジョーカー以外は四枚ずつある。場に出たカードのうち、最上位のカードが複数あると、最上位のカードを出した者だけが、更に一枚出す。こうして、結局、最上位のカードを出した者が、場に出ているすべてのカードを持っていくことができる。

これを延々と繰り返す。やがて、持ち札の無い者が次々と脱落していき、最後に、すべてのカードを手中にした者が勝利者となる。

単純なゲームである。数の分らない幼児も、少しサポートをすれば、充分仲間に入れるところがミソなのである。

結局、ただ一枚しかないジョーカーを初めに手にした者が、勝利者になる。これもミソであり、この利点の為に、私は「戦争」を選んだ。

実は、職場を出る直前、トランプにある細工をしてからポケットに入れ、職場を出た。

細工とは、ジョーカーを探し出して、一番下にしたことである。

カードを皆に配る前、私は皆の見ているところでカードを切る。その時、一番下のジョーカーだけは最後まで手放さず、最後に一番上に乗せる。そして、一番勝たせたい相手からカードを配る。

私が勝たせたい相手は、いちばん年下の子どもだった。

いちばん下手なはずの子が勝つゲームというのは、他の誰でも勝つチャンスがある、ということである。次にやる時に、年長の子どもは、今度こそ自分が、と意気込むはずである。

案の定、最年少の男の子の勝ちだった。

勝った子は満足気である。上の子たちは口惜しそうな顔をしている。

ふと気がつくと、いつの間にか、部屋の隅に、中二と聞いている長女が立っていた。どこからか出て来たようである。

私は、長女も誘って、もう一度「戦争」をやった。

二回戦が終わった頃、かなり長居したことに気がついた。初の押しかけ訪問にしては、少し度が過ぎたようである。

再来を告げて、私は、その家を辞した。

帰りは、子どもたちが勝手口から手を振って見送ってくれた。

最初、母親からシャットアウトされた時、私は犬と遊び始めた。そこから道が開けた。

その後、たびたびの家庭訪問で、小さい子が居れば小さい子と、犬や猫が居れば犬や猫との遊びから目的に近づいていくというやり方を繰り返した。ほとんどの場合、成功したと思う。

だが、この時は、結果を予測して、したことではなかった。窮余の一策という言葉が当てはまるかも

しない。結果的には、第一の関門を突破することができた。

だが、この後、関門はいくつもある。いくつあるかさえ、見当もつかない。最終的には、向こうから（この家族の場合、五人の子ども全部と母親が）心を開いてくれるのが目的である。

「馬を水辺に連れて行くことはできるが、馬が望まない限り、馬に水を飲ませることはできない」という古くからの諺どおり、自発的に心を開いてくれなければ、教育相談という仕事の目的は達せられない。

警官の容疑者逮捕や、借金取りと、本質的に違う点が、ここにある。

相談員の仕事というのは、向こうから、自発的に、自然に、心を開く場（雰囲気のようなもの、と言ってもよい）を創ることなのである。

*

平安朝の末期、日本に曹洞禅を創始したと言われる道元禅師の言葉に、

「おのれを持ち運びて方法を修証せんとするは、迷いなり。

方法おのずから来たりて、おのれを修証するは悟りなり」

というのが、有るそうである。

また、今から二千五百年前、春秋時代の中国に生まれた老子という人の、

「太上は、無為にして化す」

という考えと、共通点があるように感じる。太上とは、極上とか、最上、ベストという意味である。無為とは、自然の成り行き、とでも言い換えたらよいだろうか。化すとは「感化する」という意味である。

人為的に、あれこれと策を弄するのではなく、自然の成り行きに任せながら、おのずと人を感化していくのが最上、という意味だと思う。

また、一九四〇年代の初め、ジークムント・フロイトが構築した精神分析理論（十九世紀末から二十世紀初頭）に基づく「自由連想法」による精神分析が主流だったアメリカの精神医学、臨床心理学の世界で、「ノン・ディレクティブ・カウンセリング」（国学院大学助教授（当時）友田不二男先生は、「非指示的心理療法」と訳した）という発想と実践を発表して、アメリカはもとより、その後の世界のこの分野に、革命ともいえるべき変化をもたらしたカール・R・ロジャーズ博士の発想も、老子や道元禪師と一脈通じるものがあるように思う。

その後、ロジャーズ博士は、「クライアント・セントアード・カウンセリング」（患者中心のカウンセリング）から、最後に、「ヒューマンセントアード・カウンセリング」（人間中心のカウンセリング）と、タイトルを改めていくが、その過程で、「パーソナリティ・チェンジ」（人格変容とでも訳したらよいだろうか）という概念を産み出し、それをカウンセリングの目標にした。

不安神経症や強迫神経症、ウツ、拒食、盗癖などの「症状」を治すことを目的にせず、クライアントが、みずから、おのずから、パーソナリティ・チェンジを成し遂げていく過程で、不安や強迫観念や、食べることを拒絶する無意識の感情とか、盗みへの衝動などが、ひとりで消えていき、安定した精神状態で、生き生きと生活するようになる「場」を、クライアントとカウンセラーとの関係の中に創り出すのを目標にする、という発想である。

フロイトが、患者に「自由連想法」を施していく過程で、最初に、患者に、分析医に対して「陽性感情転移」（人が、乳幼児期、親を絶対的に信頼し、依存した、その時の感情を呼び起こし、分析医に向けさせる）を興させ、その、絶対的信頼と依存の関係下に、分析医が、患者の無意識を、「解釈」という手段を用いて操作していき、症状を解消、あるいは改善し、最後に、陽性感情転移を解いて、治療を終わる、というのと、比較すると、人工と自然、作為と不作為、くらいの本質的な発想の違いがある。

私が、教育相談という仕事でめざしているのは、単に不登校の子が登校するようになるとか、盗みをする子が盗みをしなくなる、とか、そういう症状、または、行動の改善だけに留まらない。

人格の変容によって、非社会的行動、あるいは、反社会的行動が、おのずから消失していくのはもちろん、これも、カール・R・ロジャーズ博士が提唱した概念であるが、「フリーリー・ファンクショナル・グ・パースン」（先天的、後天的に潜在している身心の全機能が、めいっぱい働く人）に育つような場

を創る、しかも、その場は、クライアントと私との、人と人との関係の中で創り出す、そういうレベルをめざしていたのである。

幕末から明治維新にかけて活躍した長州の人々の中で、中心的な活躍をした人々の多くが、松下村塾を開いていた当時の吉田松陰と何らかのかかわりを持っている。ごく短い期間であったらしいが、松陰は、その人たちと松陰自身のかかわりの中で、先天的、後天的に潜在している機能が、めいっばい働きだすきっかけとなるような「場」を創造したのではないか……と、私は考える。

やはり、幕末、越前の橋本左内、長州の大村益二郎、福沢諭吉、長与専斎、箕作秋坪、佐野常人等、歴史に名の残っている人々を多く輩出した、大阪、適塾の創始者、緒方洪庵も、そのような「場」を創ったのかもしれない。

幼稚園、学校という教育機関、教育委員会をはじめ、教育研究所、教育研修センター等の教育補助機関は、「フリー・ファンクショナル・パースン」が育つような「場」を創造することを、めざすべきである。

単に、企業に役立つ人材の育成などという低次元の目標を持つべきではない。

よく、親や教師から聞いた言葉がある。

「上の子は育てやすかったけれど、下の子は育てにくくて……」とか「この生徒は、非常に指導しにくくて……」とか。

しかし、子どもや、生徒からすれば、「うちの親は育ちにくい親だ」とか、「あの先生は、伸びにくい先生だ」という見方があるはずである。

児童生徒が育ちやすい親、伸びやすい教師、指導者を、教育に携わる人は志して欲しいと思う。

*

話を元に戻そう。

再訪を胸中に期していた時、学校から電話がかかってきた。

母親が警察に逮捕され、子どもたちは全員が児童相談所に預けられた、というのである。

母親の逮捕容疑は、覚醒剤の取引場所の提供だという。

私は驚くと同時に、なるほど、と合点がいくところもあった。

あの家の中に複数潜んでいた正体不明の怪しげな感じの男たちは、覚醒剤の密売人だったのかと。

また、彼らや母親が、あれほど私を警戒したのも、違法物の取引きという事実を隠す為だったか、と。

しかし、一方では、私は空振りをした時のような口惜しさも感じていた。

体で聴く

中学校の校長から電話が来た。

至急、学校に来て欲しいと言う。今、生徒が暴れていて、収拾がつかない状態とのこと。電話を通して聞こえてくる声や話し方が、事態が切迫していることを感じさせた。

直ちに私は学校に向かった。

玄関には数人の男性教師が待ち構えていて、私を守るかのように、まわりを取り囲みながら会議室に案内した。その奥の席に座らせると、教師たちは廊下に出て、会議室の前に一列に横に並び、誰も入れないように警戒していた。

だが、すぐに、ドヤドヤと、多勢が駆けて来る足音がしたと思うと、私の入っている部屋の前で、怒号が入りまじり、激しいもみ合いが始まった様子だった。

部屋の中に入ろうとする生徒たちを、室前にバリケードを張った教師が阻止しようと揉み合っていると察して、私は席を立った。ドアを開けに行こうとしたのである。

しかし、私がドアに着く前に、ドアは外側から開いて、昂奮しきった様子の生徒数十人が、ひとかたまりになって室内に雪崩れ込んできた。

彼等は口々に、

「お前は誰だ？」とか、

「どこから来た？」

と、叫んでいた。

私は、何故か理由は解らないが、とにかく、彼等が私の身分を気にしているらしいと察し、ありったけの名刺を彼等に渡した。

彼等は、名刺と私を交互に見詰めていたが、何か釈然としない表情で、

「本当に、警察じゃないのか？」

と、確かめてきた。

「警察じゃない。その名刺の通り、教育研究所の安江と言う者だ」

と答えて、私はようやく、彼らが警察を気にしていたらしいと、気がついた。

「今日、ぼくがここに来たのは、君たちが先生方に聴いて欲しいこと、わかって欲しいことを、先生

方に代わって聴き、君たちの希望が叶うよう、なんとかする為だ。時間は充分にある。誰からでも、何からでも、思いついたことから話してくれ」

そう言って、私は近くの椅子に腰を降ろした。

私が椅子に腰を降ろしたのは、とことん話を聴く、と言う私の意思を、姿勢で示そうとしたのである。すると、私を取り巻いて、いきりたっていた生徒たちから殺気のようなものが少し無くなったような感じになった。

ひとりが、昂奮した語気で話し始めた。

がっちりした大柄の生徒で、このグループのリーダーだなど、私は思った。

怒り、昂奮からまだ醒め切っていない様子だった。

途切れ途切れに、彼が吐き出した言葉を拾い集めて整理すると、次のようになった。

「先生たちは、俺たちを、この学校の生徒だとは思っていない。どこかの見知らぬチンピラのように、無視している。何を言っても聴いてくれない。相手にしてくれない」

彼が話している途中から、他の生徒も口々に叫びだした。その中に「先生はエコヒイキしている」という言葉が幾つか入っていた。

彼らの話は二、三十分続いた。

話のあいだじゅう、私は、いちいち頷きながら、「ウン」とか「ハイ」とか、話を聴いているというサインを示し続けていた。

単純な表現だが、ただ頷くという身体的表現と、「ウン」「ハイ」という音声表現が、非常に大事だということを経験上、私は痛感していた。

通常、私が職場の人や、友人、身内に話す時、頷くとか、「ウン」とか「ハイ」とかの反応にも出会わなかった。私の話を、その人がどのように聞いているのか、話している途中に疑念が生じることが、しばしばあったからである。教育相談室という職場の相談員でさえそうだった。

この原稿を書いている三、四十年後の今、私は、あの時、もっと反応を現すようにと、年下の相談員たちに注文をつけるべきだったと、後悔している。

ただ、「ウン」や「ハイ」が多すぎてもいけない。多すぎると、話し手は、絶えず、話すことをせかされている、と感じるからである。

どのような「ウン」や「ハイ」が適切か、また、それを言うタイミングはいつがいいのか、これは実践によって会得していくしかないことである。

ともあれ、私が、頷きながら生徒たちの話を聴いていると、やがて、ひととおり、話を終えたのか、言葉が途絶えた。

そこで、私は、生徒たちの顔を見回しながら、

「先生方には、エコヒイキはやめて欲しい。自分たちの話もちゃんと聴いて欲しい。他の生徒と同じように、生徒として、平等に扱って欲しい、というふうに、僕は理解したが、それで間違いないかな？もし、違っていたり、付け足したいことがあれば、何でも言ってくれ」と言いながら、生徒たちの反応を見守った。

生徒たちは、互いに顔を見合わせながら、「何かないか？」とか「どうだ？」「いいかな？」などと、囁き合っていたが、やがて皆が頷いた。すると、代表格の体のがっしりした生徒が「それでいいです」と答えた。

そこで、私は、

「今度、校長先生と教頭先生に、今日、君たちが僕に言ったことを、自由に言える機会を設けようと思う。僕が司会をするから、遠慮なく、思う存分、日頃言えずに溜まっていたことを、自由に話してくれ。どうだろうか？」

と、生徒たちに訊いた。

生徒たちは、また、互いに頷き合い、小声で何か訊き合っていたが、

「いいです」

と言った。

そして、生徒たちは、入って来た時とは打って変わって、静かに部屋を出て行った。

入れ違いに、校長先生が入ってきた。

「どうでした？」

と訊かれたので、

「聴きました」

と答えた。

校長先生は、ちょっと怪訝そうな表情を浮かべたが、私は話を続けた。

「生徒たちと約束しました。できるだけ早く、校長先生と教頭先生二人だけで、生徒たちの言い分を聞く時間を設けてくれませんか。」

その時、生徒が何を言っても、叱ったり、説教したりせず、ひたすら聞くだけにしてください。万一、生徒から、何か要求があったときは、できない事は『できない』とだけ答えてください。できないことを、もし『できる』と答えてしまうと、のちのち、生徒たちの信頼を失って、取り返しがつかないことになります。

私が司会をしますので、万一、話がつれた場合、私が全力でフォローします。これは、一方的に学校側の弁護をするという意味ではなく、学校側の言い分や考えを生徒たちに理解できるように努力するという意味です。

会場は、話したい生徒や話を聞きたい生徒が誰でも入れるよう、広い場所がいいと思います。また、こういう会を開くということを、全校生徒に知らせておいてください」

二、三日して、日時の連絡が入った。

会場は、二クラス分の生徒でも入れそうな視聴覚室だった。

かなり空席が目立ったから、教室内の生徒は三十人程度だろうか。少ないな、と、私は意外に感じた。前に学校から聞いていた話では、抵抗派のシンパは百人以上もいるような印象を持っていたからである。

私は、正面の椅子に座った。

続いて、校長、教頭両先生が入って来て、壁際の傍聴席のような位置に座った。

改めて自己紹介をしてから、

「この前、僕は、きみたちの要望を聴いて、校長先生には伝えておいたが、今日は直接、ナマの声を校長先生や教頭先生に聴いていただきたいと思って、この席を設けてもらった。

誰からでも、どんな話からでも構わない。心に浮かんでくるままに話してください」
しばらく沈黙が続いた。

室内には、この前、私を取り囲んだ時の殺気や熱気はなく、ただ、静寂だけがあった。

「そうか、あの時、溜まっていたエネルギーを出し尽くしてしまったのか」と思い、

「同じ話を二度も繰り返すのは、気が乗らないという雰囲気だが、今日は、校長先生に直接話す良い機会だ。ふだんは、校長先生に直接話すという事は、そう無いと思う。いい機会だから、日頃、思ったり、感じたりしていることを、思いきり話したらどうだい」と、呼びかけた。

やや、間があって、この前、私に真っ先に話しかけてきた、大柄の生徒が立ち上がり、話し始めた。

エネルギーが抜けたせいとか、低い声で、ボンボンと、私に話したようなことを、繰り返し述べた。

生徒が話し始めると、校長先生は席を立ち、二、三步前に出た。ほぼ生徒たちの正面に近い位置に立ったのを見て、私は「本気で生徒の話を聴こうという姿勢を、立ち位置で示したな」と思った。

この、校長先生の姿勢が生徒に伝わったのか、生徒の音声もはっきりと聴きとりやすくなった。

そして、何人かがフォローして、最初の発言で抜けたところや、説明の不十分な部分を補った。

発言は冷静に行われ、昂奮した感じは、もはや無かった。

生徒の発言が、ひと通り終わったと見定めて、

「今の、生徒たちの発言に対して、校長先生の方からどうぞ」と私は、校長に声をかけた。

校長先生は、簡潔に、

「皆の気もちが、良く解った。今度は、私から全部の先生によく話して、皆の希望がかなうよう、でき

るだけ努力する」

と述べた。

私は散会を宣した。

生徒は席を立つと、それぞれが座っていた椅子を机の下に押し込み、静かに、黙々と去っていった。

生徒が一人残らず出て行くと、校長先生が私の所に来て、

「驚いた。生徒が椅子を戻して出て行った！」

と呟いた。今まで、生徒は、椅子の後始末などしなかったらしい。

私自身は、話し合いが、あまりに平静に、混乱もなく、短時間で終わってしまったことに、拍子抜けしていた。

その後の学校側の努力には、目を見張るものがあった。

先生方が手分けして、旧抵抗勢力との接触に努めたいらしい。

また、夏休みに入ると、キャンプに行き、一つのテントと一つの鍋釜で、文字通り寝食を共にして、対話に努めたと聞いた。

校長先生の強力なリーダーシップが原動力になったのでは、と私は推測している。

この稿で、私は「聞く」「訊く」「聴く」と、三種の字を使った。これには意味がある。

「聴く」という字には、私にとって、特別な意味がある。

文字通りに解すれば「耳を傾けて聴く」ということだが、私は、個人的に「体で聴く」という意味で使っている。

「体で聴く」とは、どういうことか。

まず、第一に、耳では聴いていない、ということがある。

耳で聴かなくて何で聴くのか。

生理学的には耳で聴いているのだろうが、私は、聴いている時、耳には注意を集中しない。

初めてこの仕事を始めた頃、一生懸命に、耳を傾け、耳に注意を集めて聴こうとした。

一時間も経たないうちに、私の首や肩はガチガチに凝り固まって、頭もポォーっとし、それ以上続けられないほど、疲れ果てた。まだ、三十歳前後の若さだというのに。

それほど懸命に聴いているのに、録音テープを再生してみると、クライアントの心が、ほとんど聴けていないことが解った。

どうすればいいのか？ 何度自問しても解答は見つからず、それでも仕事は続いた。

何年かして、ある日、ふと、クライアントの話を聴いている最中、首や肩に力が入っていないのに気付いた。テープを再生してみると、けっこう心が聴けているのではないか、と思った。

そう言えば、首や肩がガチガチになっていた当時、一人のカウンセリングの回数は、決まって二、三回だった。四回以上続かなかった。

当時、アメリカには「三回カウンセラー」という言葉があると聞いたことがある。

アメリカでは、二十世紀、オーストリアのジークムント・フロイトの考えた「精神分析療法」が流行だった。高名な分析療家は、高額な治療費を取る上、一人の患者を二十年、三十年と治療するらしかった。もちろん、このような治療を受けられるのは、富裕層に限られていた。

三回しか続かない、というのは、クライアントの意識の表層からもっと下の層の心に届かないということである。そして、心の悩みは、意識より下部の深い層に源があるのである。この深い層に進めないカウンセリングは、クライアントの方から効果なしと判定されて、見限られてしまうのである。

私が、最初に、クライアントと共に、この「意識の層」より下の、いわば「半意識の層」に到達できたのは、三十四歳の時だった。カウンセリングの勉強を始めてから八年経っていた。

「家まで送ろうか？」

学校から教育相談に紹介されてくる児童生徒の大半は、学校に来ない、という理由からだった。

一九六〇年代までは、親が家事労働をさせる為に、子供を休ませる、という例があった。一九七〇年代に入ると、サラ金に追われて、居所を転々と変え、住民登録も故意にせずに、子どもも家から出さな
いで、ひたすら身を隠しているという家庭が現れた。

この頃から、社会やマスコミが「登校拒否」を話題にし始めた。

しかし、一方では、親や教師が登校させようとしても、どうしても登校しない児童生徒も確実に増え
ていた。

中二の少年が母親に連れられて相談室に来た。

少年は一言も口を利かなかった。非常に緊張した面もちをしていた。

少年は親にも担任教師にも何も言わないそうで、学校で何があったかは皆目わからない、と言う母親の話だった。

私は少年を遊戯室に入れ、卓球に誘った。

「卓球をしたことはある？」と私が訊くと、少年は黙って首を横に振った。

しかし、始めてみると、彼は正確に返球してきた。担任教師の話では、運動部で活躍しているそうだから、身体能力、運動感覚がかなりあるようだった。

すぐに打ち合いになった。

私が卓球を始めたのは五十歳の時だった。ほとんど卓球をしたことのない小五の男児と始めたのが最初だった。

保護者や学校から相談申し込みが入った時、小、中学生であれば、その子の得意なことや好きなことを訊いて、それから入るのが私のやり方だった。四十から五十歳までの十年間で、バレーボール、トランポリン、アイススケート、サッカー等、多くのことを私は身につけた。

小、中学生は、大人が本気で何か教わろうとすると、実に熱心に教えてくれる。身近に居る大人は、教わろうとしても、いい加減な事しか言わないが、子どもはそうではない。

私は、「登校拒否」と呼ばれた小、中学生から、実に多くのことを学んだ。そういう師弟関係（小中学生が師で、私が弟）を築いていく過程で、共に「フリーファンクションニングパース」に近づける「人間関係という場」が造られていった。

最初、古い小学校の空き教室を利用して、教育研究所を創設した当初は、小学校の運動場がよい遊戯治療場になった。運動場には、滑り台、回旋塔、ろくぼ、とうはんぼう、ブランコ、ジャングルジム、鉄棒等、運動用具が豊富に揃っていた。

私は、私自身に「心は赤児の如く、体は若者の如く、知恵は賢者の如く」を目標として設定した。来所した子どもと私は、これらの運動具を思う存分活用した。運動場では、鬼ごっこをはじめ、野球もサッカーも、バレーボールもバドミントンも、人数なりに楽しめた。

しかし、その小学校が廃校となり、校舎を撤去して土地を再利用するという市の計画の為に、図書館、視聴覚センター等と一緒に新築の建物に移ると、まともにできるスポーツは卓球だけということになった。

卓球をしながら、私は「速い球だな！」とか「今のは大きくカーブしたぞ」などと、言葉を出す。その言い方は、向こうが何か言葉を応じても良く、また、何も言わなくても不自然ではないように、話しかけているとも独り言ともとれる言い方をする。それは、私の声や言葉がきっかけになって会話が始ま

れば良いが、相手がまだ会話をする気分になっていない時にも、何も言わなくても気詰まりを感じないで済むような言い方である。

通常、誰かが誰かに話しかけて、相手が何も言わないと、気まずい雰囲気になる。しかし、片方が独り言を言ったのなら、答えなくてもさしつかえない。言う、言わないの選択権を、私は相手に渡しているのである。

三回目、中二の少年は相談室の前まで来たが、家の方に戻って行ったら、一緒に来た母親が告げた。その声を聞いて、事務職の人が黙って車を出した。私とその車に乗った時すでに女性相談員が助手席に乗りこんでいた。彼女が何で乗っていたのか、おそらく、私がどんなふうに少年を連れ戻すのか、見ておこうというつもりだったのだろう。車を出した職員も少年を連れ戻すという思いからだっただろうと思う。

しばらく走り、幹線道から脇道に入ったところで、車が追いついた。

私は、窓をあけ、顔を出して、

「家まで送ろうか？」

と、声をかけた。

少年は歩みを止めず、前を向いたまま、黙って首を横に振った。

「じゃあ、来週の○曜日、○○時にまた」

とだけ言って、私は首を引っ込め、窓を閉め、車を戻すように頼んだ。

自発的に車を出してくれた職員は、やや不満そうだった。彼は、少年を連れ戻す手伝いをしようと思気込んでいたのに、私があっさり少年を帰したのが不満だったのかもしれない。だが、黙って車の向きを変えた。

次の週、少年は予約した通りの日時に相談室に現れた。その次の週も。

だが、そのまた次の週、母親から電話があり、「今日は学校に行ったので、そちらには行けません」と告げられた。

その後、一度も、学校や母親から、登校しないという知らせはなかった。

この少年とは、結局、五回会っただけだった。一回は「家まで送ろうか？」と声をかけた時であり、他の四回は卓球だった。

私は遂に一度も少年の声を聞けなかった。

学校に行かなくなり、また、行くように変わった少年の心の中身を、私はまったく知らない。

ただ、三回目の「家まで送ろうか？」に、彼の心がある変化を起こした、と私は思っている。

通常、学校に行かない子どもたちは、自分が悪いことをしている、と思いついでいる。

それは、親の「学校に行きなさい」という言葉や、「学校に来い」という教師の言葉をさんざん聞かさ

れている為である。

あるいは「小、中学校は義務教育だから」と聞かされた児童生徒もかなり居た。

学校に行かない大部分の児童生徒が、「学校に行かない」ということで負い目を感じており、あなたも犯罪者のように、世間を憚って生きている。

教育相談に行け、という学校の指示も、生徒にとっては、義務教育の一貫と受け取られていたかもしれない。

「家まで送ろうか？」という私の言葉で、少年は「俺は家に戻っていいんだ！ 教育相談に行くか行かないか、自分で決めていいんだ！」という、ショックを伴った覚醒を感じたかもしれない。その覚醒は、少年の心にあった義務感や強制という目に見えない鎖が、一瞬に飛び散って、自由と解放の感覚が全身を包む、という感じで、もたらされたのかもしれない。

もっとも、この感覚は、私が中学三年の時に体験したものだ。

小学校に入学するや、軍国主義教育が始まり、中学三年になると、爆弾を抱えて米戦車のキャタピラの下に跳び込む自爆を強要された。背けば死、逃げるも死、光明の見えない闇の中をさまよっているうちに、突然の「終戦のラジオ放送」によって、解放されたときの感覚、さらに、その後次々にもたらさ

れた「自由」「民主主義」によって、軍国主義教育の縄目が次々にほぐれていった、あの感覚。何かに固く縛られているような、緊張している少年に、あの解放感を味わってもらいたかった。

結局、私は少年の声を聞くことができなかった。何で学校に行かなくなったのか、そして、また、何で学校に行く気になったのか、私は何も知らない。ただ、解ることは、学校に行くエネルギーを失った彼が、再びエネルギーを取り戻した、ということだけである。

だが、もっとも大事なことは、クライアントがエネルギーを取り戻し、さらに、もっと大きなエネルギーを出せるようになることである。

私の教育相談の目的は、この、その人にとっての、その時点での最大のエネルギーを發揮できるようにする状態を、私とクライアントとのかかわりの中に創り出すことにある。

プラレールで遊ぶ少年

当時、学校に行かなくなった五年生の男児が来所していた。

彼も無口な子で、黙々とプラレールをありったけ使って、プラレール以外の物も総動員して、部屋いっぱい、レール、橋、駅、山、川、海、森等の風景を創り出した。

毎回同じ作業が続いた。ただ、創り上げる風景は違った。おそらく、教育相談に来ない日も、次に創る風景をイメージしていたのだろう。プレイルームに入ってきた時に、彼は、いつも息を弾ませていた。バス停から走って来るのだろう。部屋の中で迎える私には目もくれず、プラレールに突進する。それがいいのである。

母親によっては、子どもを連れてきた時、「先生にご挨拶なさい」とか、帰り際、「先生にお礼を申し上げなさい」などという人がいる。子供は固い表情と口調で「先生、お願いします」とか「ありがとうございました」とか言うが、この状態では、今以上のエネルギーは出てこない。吾を忘れて、周囲も忘

れた状態で、内部から湧き上がるエネルギーのまま行動するとき、その時点での、その人の最大のエネルギーが出る。

一年近く、小五の男児は私と、プラレールによる創作活動を続けた。ほとんど口を利かず。

翌年の四月の初め、いつものように時間を使って、帰り際、

「ぼく、来週からここに来られないんだ」と言った。

「どうして？」と問い返した私の頭の中に、父親の転勤か何かで、遠くに転居するのか、という思いがよぎった。

「今年から学校に行くことにしたんだ。だから来られないんだ」

しかし、翌週の同じ曜日の、同じ時間に、少年がヒョッコリ現れた。

「やあ」と私は迎えた。

「今日は先生に話して早退してきたんだ」と少年は言った。

「そうか、じゃあまた、一時間思いっきりやろう」と私が言い終わらないうちに、少年はもうプラレールを手にしていた。

そして、この日が最後だった。

しばらくして、少年の担任が私に会いに来て、一枚の紙を渡した。作文の時間に少年が書いたものだと
言う。以下原文のまま。

六年生になつて

ぼくは、とうとう六年生になりました。
五年の時、七ヶ月も休すんでしまったので
これから、休まないようしたいと思ひます
。でも長く休すんだので、ぜんぜん強が
りません。だから、長く休すんでえんじ
と思ひます。それに、クラブも委員会もや
ていないので、顔を合わせるのがはずかしい
です。でも人間は、はして一人では生き
けないし、ぜったい顔を合わせないこと
は、できないのです。自分でわかるい
んごすから、はずかしながら、顔を合
わせることにします。だから、これ
から、これから学校に入るように
します。

完

「顔を、合わせるのがはずかしい」が「自分でもわるいんですから、はずかしがらず顔を合わせることにします」というのは、学校に行こうという意思が生まれた、あるいは、意思が強くなったと思われるが、意思が強くなる為には、心のエネルギーが強くなるのが欠くべからざる必要条件である。

植物を育てる場合、昔話にある「早く芽を出せ柿の種、芽を出さないとチョン切るぞ」と脅しても、芽が出る訳ではない。だが、多くの親が、この手の脅して、子どもに勉強させようとしたり、学校に行かせようとする。

柿の種であれば、まず土壌造りから始め、種を埋めた後は、適度に水や肥料を与えるだろう。何故、人にはそれをしないのか？

心のエネルギーについては、実は、科学もまだ原初の状態から少し進み始めた程度の段階と云っていいだろう。二十一世紀にさしかかる頃、脳内で微量に分泌する種々のホルモン（たとえばアドレナリンなど）の分泌を促す薬がアメリカで発売され、ウツ状態にある人に投与したら元気になったという文献を読んだことがあったが、当時、日本ではまだ認可されていなかった。

また、体の健康に関しては、マスコミが頻繁に情報を提供するようになったが、心に関する情報の提供は極めて少ない。

そこで、人は、それぞれ自分自身の体験を振り返って、いつ、どんな人から、どれくらい、心のエネルギーを貰ったかを思い出し、その時、その人がどんなふうに関係してくれただかを参考にしない。私も、自身の体験を思い出しては、子供への接し方を考えてきた。

私は、幼少期から青年期にかけて、人から冷と温という両極の接し方をされてきた経験を持ち、その経験が、仕事上大いに役立った。

「汝の欲せざるところを、他人に施すこと勿れ」

「己の欲するところを他人に施せ」

の古格言の通りすればよかった。

自分自身を振り返れば、クライアントが現わす、あるいは語るどんな心も、私に無いものはない。不安、怖れ、盗み心、助兵衛根性、怒り、恨み、その他、あらゆるものが私にもある。だからこそ、他人の悩み、苦しみも、「共感的」に理解できる。私の内部にもあるからである。

ただ、クライアントと私との違いは、その感情に圧倒されているかいないか、の違いにすぎない。

学生時代、私は鳶職の助手をしたことがあった。朝鮮戦争（一九五〇年～五三年）に起因する好景気

の時代で、ビルの建設が次々と始まった時である。

始め、二十メートルの高所の、鉄骨と鉄骨の間に渡してある歩み板の上を歩き始めた時、私は高所恐怖に圧倒されて足が動かなくなった。肩には鳶から命じられた鉄筋の束が乗っている。この鉄筋を鳶の所に届けなければならぬのだが、進むことも、退くこともできなくなった。

鳶から「下を見るな！ まっすぐ前だけを見て歩け！」という叱咤が飛んで来たが、私の脳裏には、二十メートル真下の地面に積んである鉄筋や様々な建築材料の山が焼き付いている。しかも、安全ネットも、体に結ぶ一本の綱もなく、頭にはヘルメットもないことを知っている。（当時は鳶の人もヘルメットはかぶっておらず、会社は、働く者への安全対策を何もしていなかった）今さら下から目を逸らし、でも、下を見ていない前には戻れない。

私は、真下をじっと睨みつけた。自分自身の恐怖の元凶を睨みつけた。しばらく睨んでいるうちに、私の心は少しずつ落ち着き、吐が座ってきた。すると、少しずつ前に進めるようになり、鉄筋を鳶の人に届けることができた。

歩み板というのは、厚さ数センチ、巾三十センチ、長さ数メートルの一枚板である。人が歩いても折れる怖れはないようだが、歩く度に上下に揺れる。

始めは、足を踏み出した膝下から上がって来た板に足の裏がぶつかって戸惑い、ある時は板が下がった時に足を出して突んのめりそうになったり、命が縮む思いだったが、板が上下動するリズムに合わせ

て歩くことを覚えたら、ためらわずに歩けるようになった。恐怖が消えたわけではない。恐怖があるから油断なく足許から注意を逸らさない。

不安や恐怖や罪悪感に苛まれている人の多くが、内心を他人に隠し、本人自身も感じないようにしようと努める。

しかし、それでは、いつまでも苦しみが続く。あるいは、苦しみがどんどん増幅してきて、動きが取れなくなる。

己の本^さ性^がになる

夜、成人の女性が訪れてきた。

教育研究所の教育相談では、幼稚園から高校までの幼児、児童、生徒が対象だが、私は、希望があれば、乳幼児でも成人でも、誰でも、いつでも、応じていた。

女性は、いかにも疲れきったという表情で、職場でいじめられていると、力無い聞きとるのがやっとの呟くような話し方で少し状況を説明すると、すぐに黙り込んでしまった。

見ていると、眠りかけているようにも見えた。私は黙って彼女を見守っていた。

一時間ほどそうしていると、やがて彼女は目を開き、また来る、と言って帰った。

次に来た時、彼女は、眠らせてくれ、というようなことを言った。独りでは良く眠れない、誰かが見

守っていてくれると良く眠れる気がする。

私は椅子を並べて横になれるようにした。彼女は、すぐに眠り込んだ。

一時間ほどすると、彼女は自分で目を覚まし、次回を約して帰っていった。少し疲れがとれたような表情に見えた。

三回目に来所した時、彼女の様子が前とは違っていた。椅子に座ると進んで話し始めた。

母子家庭で育った。

中学に入った頃、母が精神分裂病になり、仕事をやめた。母方の縁で、親類の家の世話になることになった。

三年生の頃、その家の主人に犯された。

母に訴えたが、母は泣くばかりで、何もしてくれなかった。

このあたりから、彼女は泣き始めた。

高校二年の頃、そんな生活に耐えられなくなり、母に当たった。ただ泣くばかりの母親に業を煮やして「何の役にも立たないなら、死んじまえ！」と、悪態をついた。

彼女は号泣していた。号泣しながら、とぎれとぎれに話し続けた。

すると、母親は泣きながら外に出て行った。

そして線路に入って死んだ。

このあと、彼女は、ただ、ひたすら泣き続けた。

私は黙って、彼女と向き合い続けていた。

四回目に彼女が現れた時、私は目を疑った。

最初、彼女と対面した時、疲れ切って、精も根も尽き果てた三十代半ばの女性と見た。

身に付けていたのも、着古して薄汚れたような感じのもので、髪もバサバサだった。

だが、この日の彼女は光り輝いていた。

着ているものは相変わらず古びて粗末なものだが、髪も顔も艶があり、表情も明るく、二十そこそこの若さに見えた。

さらに、稀に見る美貌だった。体格も良かった。

彼女は席に就くと、前回の続きを語り始めた。

母親が自殺した後、彼女は親類の家を出て水商売に入り、自活を始めた。高校もやめた。それで生活は何とかできたが、店主や同僚や客とうまく付き合えなかった。一つの店に永続きせず、転々と店を換えた。だんだん行きづまり、自殺を考えるようになった。そして、中学の時、教育研究所に通っていたという同僚から私のことを聞き、訪ねてきた、と語った。話の中から、彼女が二十三歳ということを知った。

この日も彼女は泣いたが、その時間は短かった。そして、三十分ほど眠って帰った。それが最後だった。

二、三年後、電車の中で見かけたことがあった。髪も、化粧も、服も、バックも、相当に値が張りそうなるものを身につけ、顔色も良く元気そうだった。生き生きと働いているなと思った。

剣の極意として「身を棄ててこそ、浮かぶ瀬もあれ」という言葉がある。

彼女は、私の前で恥や外聞を棄て、自分が母親を死に追いやった、と語り、全身で罪悪感に浸り切った。一旦身を棄てたのである。

すると、だんだん心が晴れてきて、全身の細胞に生氣が甦り、二十三歳の若さと輝きを取り戻すことができた。

カウンセリングとは、カウンセラーという楽器を、クライアントが自由に、即興で弾くことである。楽器は、黙って弾き手の弾くままに音を出す。楽器と弾き手が良ければ、素晴らしい調べが奏でられる。楽器が悪く、弾き手が出したいような音を出さなければ、いい調べは生まれない。

二千五百年前、釈迦や孔子と同時代の、世界の三傑の一人と言われる老子が、

「太上は無為にして化す」と言ったと聞いた。太上とは、最上、または最善という意味である。無為にして化すとは、弾き手が好きなように楽器をいじっているうちに、次第に調べを産み出していくこと、他の誰のでもない、その人自身の曲を奏でるようになること、と言えようか。

ここで大事なのが、自由と即興という二つの要素である。

自由というのは、心理的空間が無限大であることを意味する。即興というのは、絶えず流動している心のある瞬間瞬間の有りようがその通り表現されるということである。

人の心は、水の流れに似ている。流れている時は、たとえ、廃水などで汚染されても、やがて元の澄んだ流れに戻ることができる。だが、流れが停まると、腐敗が始まり、生物が死滅していく。

二十三歳の女性は、罪悪感に支配されて、心の流れが停滞してしまっていた。心の中に罪悪感を閉じ込めていたからだ。その扉を開いて外に放出してから、彼女の心の流れが甦った。

良いカウンセリングで、心の流れが甦るのは、クライアントだけではなく。カウンセラーの心の流れも甦る。心の流れが甦ると、おそらく、全身の細胞や内分泌の活動も活発になるのだろう。全身がすっきりと、調子がよくなった感じがする。

カウンセラーとクライアントは共生関係にある。カウンセラーとクライアントの人間関係の中に生まれる何か（私は「場」と言ったが）が、片方だけでなく、両者を生き生きとさせる。

クライアントに向き合った時、私は、自身の腹の奥底に注意を集中する。クライアントの話し声は、聞こうとしなくても、おのずから聞こえてくる。その話と声、抑揚、高低、強弱、音質等に、私の腹の奥底がどういふ反応を興こしているのかを感じ取ろうとする。そしてその感じを、できるだけ端的に言葉に現わそうとする。

先の例で、女性が号泣し始めた時、私は一言「自分を責めている。お母さんに死ねと言った自分自身を」と言った。女性は、更に激しく泣きじゃくった。

「自分を責めなくていい」とか「自分を責めるな」ではない。

そう言われれば、多少はホッとすることも出来ない。でも、その程度では私のめざすレベルではない。己を責め抜いて、自身をがんじがらめに縛り上げている自分を、ありのままに、全身心で感じること、それが私のめざすレベルである。

単に心で感じるだけではない。ある体の感覚を伴って感じることに、それが全身に劇的な変化をもたらす。その瞬間、クライアントの顔が、削りたての白木のような、すがすがしい表情になる。

別の女性が、カウンセリングの途中「先生、電気をつけましたか？」と訊いた。昼間だった。ああ、今、暗いトンネルから抜けたな、と私は思った。彼女の視覚が、急に明るさを感じたのだった。もちろん私は電気をつけていない。

カウンセラーは、クライアントと、同じ瞬間に同じ内容の心を感じるのが良い。瞬間（タイミング）

がずれても、内容がずれても、クライアントの援けにならない。むしろ、クライアントが自分自身そのものに成り切る邪魔になる。

自分自身に成り切る、すなわち、「己の本性になる」ことこそ、不安、恐怖、落ち込み等から脱却して、全身が活性化する源である。

人の本性には共通性がある。人の体の構造が共通しているように。だからこそ、カウンセラーは、クライアントに、同席している時間の多くを共感し続けられる。

だが、クライアントが自身の感情や思いに圧倒されていても、カウンセラーは圧倒されない。もし、圧倒されると、共感から共振に変質してしまい、共倒れになってしまう。

共振にならずに共感し続けるには、カウンセラーが動揺せずに自身の内側に目を向け、内側の全てを自分自身として受け容れる状態で居続けなければならない。圧倒されるのは、自分自身を、いわば「己の本性」を受け容れられない時である。

カウンセリングの勉強を始める最初に（教育相談も同じだが）経験豊富な有能なカウンセラーとのカウンセリングを体験するのがよい。クライアントの立場になることで、己の本性に気づき、受け容れる

出発点に立つことができる。理論や知識を学ぶだけでは得られない。

一九五〇年代、私が初めてカウンセリングを学ぼうと思い立った時、カール・R・ロジャーズ博士著「非指示的心理療法」の翻訳者、友田不二男先生にカウンセリングをお願いした。

当時、私は、北海道の大雪山国立公園の縁にあった僻地の分校の教師をしていた。夏休みに入り、東京の友田先生の自宅を訪ね、数回カウンセリングを受けた後、三泊四日の軽井沢での合宿研究会に参加し、多くの先達者を知った。そして、その後数年間、当時、トップクラスと思われた五人のカウンセリングの先達のクライアントになった。一番回数が多かった人には十数回受けた。他は一、二回ずつだった。

この体験によって、カウンセリングには、どのカウンセラーにも共通するものと、カウンセラーの本性の違いに由来する違いのあることを知った。私は、自分の本性に基づくカウンセリングを見つけようと思いついた。

カウンセラー（教育相談員も同じ）になることも、クライアントになることも、「己の本性になる」目標は同じなのである。

私は、教育相談員、カウンセラーの経験を重ねると共に、徐々に己の本性になってきた。

「己の本性になる」といっても、固定した何かになるということではない。

己の本性さがになる道程をどこまでも歩み続ける、という意味である。終わりは、死が迫って意識が無く
なる時まで来ない。

忘れ難い老人

「共感的理解」と共に「受容」も、教育相談やカウンセリングには欠かせない要素である。ところで「受容」とは何だろうか？

私が退職後カウンセリングを行っていた時のことである。

女子大学生が来た。最初のカウンセリングが終わった帰り際、「実は、ここに来る前に、別のカウンセラーのカウンセリングを受けました。その先生は、終始ニコヤカで、カウンセラーはニコヤカな人だと思っていました。でも先生は一度もニコリともしませんでした。これでカウンセラーなんだろうか、と思いました」

彼女が話し終わったとたん、私は思わず呵呵大笑した。彼女の率直な話しぶりが楽しかったこともあるが、何か可笑しかった。

そう言いながら、彼女は就職してからも通ってきていた。にこやかなカウンセラーとは一度きりだと
言った。

この例からも「終始にこやかに接すること」と「受容」とは関係なさそうに思える。

大手デパートのエスカレーターガールがカウンセリングに来たことがあった。彼女は職務で一日何時
間もニコヤカに「いらっしやいませ」と客一人一人にくり返す。家に戻ると頬が引き吊っている、と話
した。彼女は、その仕事を苦痛に感じていた。

職業的笑顔は、客の自尊心をくすぐる事はあっても、それ以上ではない。

乳幼児や動物に、人の心を満たす力があることはすでに知られているが、だからこそ、親は苦勞を厭
わず子どもを育てる。だが、すべての人がそうだという訳ではない。乳幼児や動物によっても心満たさ
れない人もおり、それが親の場合は、我が子を虐待する。

自我が発達していない乳幼児や動物は、人の心を傷つけない。だから安心して近づける。

ただし、憎しみを持って近づけば、乳幼児は脅えて親にしがみつき、動物は牙をむいて反撃してくる
かもしれない。

多くの人が、乳幼児や動物に満たされるだけでは充分ではなく、偉大な存在に受け容れられない願望を持っている。その願望に基づいて、人類は神や仏を創造し心を満たそうとしてきたが、近年、神や仏で救われると信じる人は少なくなってきた。だが、偉大な存在に受け容れられない願望がなくなったわけではない。

相談員やカウンセラーも、偉大な存在にはほど遠いが、一時的には、その代わりを務めることが可能ではない。

だが、その場合も、少しでも偉大に近づければ、それに越したことはない。

凡人より一歩でも半歩でも偉大に近づけるかは、生き方にかかっている。このことを私のはっきり認識したのは、ある老人に会ったときだった。

*

私が教育研究所の教育相談に移ってまもなく、カウンセリングでは先輩の大須賀発蔵先生から声がかかった。

先生は、いくつもの会社を経営するかたわら、県の教育委員長を勤めたり、私財を投じて、全国規模の「人間関係研究会」という組織を立ち上げ、活動を全国的に展開していた。

そして、研究会の世話人の列に、私も加えてくださった。この中のある研究会の折、私は忘れ難い一人の老人に出会った。

私が担当したグループには十四人のメンバーがいた。三泊四日、朝から晩まで一室に集まって話し合うのだが、メンバーの一人に、七十前後の老人が居た。彼は、坊主頭に古びたスポーツシャツ、そしてよれよれのズボンという姿で、私を中心に輪になって座っている十三人から離れて、独り、部屋の隅に座っていた。メンバーの一人が「こちらに、いらっしやいませんか」と声をかけたとき、老人は、ゆっくりと黙礼をしただけで、その場から一步も動こうとしなかった。私には、老人が、気後れや遠慮で独り離れているのではなく、何らかの明確な意思に基づいて、そこに座っていると感じられたから、一言も彼に言葉をかけなかった。

やがて、老人はスッと立ち上がると、黙々と部屋を出て行った。そして、一、二時間して戻ってくる。と、また、前の席に戻った。

午前、午後、夜、そして次の日もまた、次の日も同じことが続いた。誰も彼の声を聴いた人は居なかった。

老人の動きは風のようにだった。皆が話し合っているのに、彼ひとり超然として自由に部屋を出入りしている。だが、皆に背を向けているとか、孤立しているとか感じさせない何かを持っている。そして、

彼の自由気ままな行動が、皆の話し合いをまったく邪魔していかない。風の如く、また、猫の如く、という動き方である。「タダモノではないな」と、私は彼の動きを視界の端で見守りながら思うようになった。

三日目の昼食の時、老人の真向かいの席が空いているのを見て、私が坐った。老人は敬遠されているのかとも思った。

「たびたび、どこかにお出かけのようですが、どこにいらしているのですか？」
席に着くなり、私は問いかけてみた。

「ああ、あれはね。退屈すると酒を呑みに出かけているのです」
老人は淡々と答えた。

「午前中から酒を出す店があるんですか？」
私は思わず聞き返した。

「ソバ屋だね。酒を注文するとコップに冷酒を入れて出してくれます」
「そうですか。それは知らなかった。僕も今度やってみよう」

老人は一切悪びれたふりも、言い訳めいたことも言わなかった。この人は、自身のすべてを受け容れている人なんだな、と私は思った。

最後の日の朝だった。

洗面に行こうとして寝室から廊下に出ると、老人とぼったり出会った。

「お早うございます」と私は声をかけた。

老人は、例の風のような動きで、私には目もくれず、無言で通り過ぎて行った。

洗面所に行くと、沢山の人が居て、その中の私のグループの人たちが「おはようございます」と私に声をかけた。挨拶を返した瞬間「アッ」と気がついた。

今、愛想よく声をかけてくれたこの人たちより、私を無視して黙って私の前を通り過ぎたあの老人の方が遙かに深い次元で私を受け容れてくれているな、と感じたのである。この感覚を言葉に現わすのはむずかしい。

だが、敢えて言えば、会期中、愛想よく接したくれた十三人の人たちの顔や名前は皆忘れた。

しかし、私の挨拶を無視した老人の姿は、四十数年を経た今も、鮮やかに私の心の中で生きているのである。あの風のような自然な動きと共に。

人の自由とは何か、人が人を受け容れるというのはどういふことか、世間的レベルを遙かに超えた深いレベルで、私は老人から学んだと思う。

人がその人自身を受け容れている程度は人さまざまである。そして、自身を受け容れている次元でし

か他人を受け容れることができない。

自身を深いレベルで受け入れている人ほど他人を深いレベルで受け容れることができる。

このことを、私は、生身の老人の生き様から学んだのである。

セッションが始まった。これが最後と思うせいとか、誰からも発言が無かった。そのまま、三十分、四十分と経った。世話役の私も、皆と沈黙を共にしていた。

遂に、重い空気を突き破るように、一人が声を上げた。悲鳴ともとれる声だった。

「誰か、何か、言ってくれないかなあ！ 皆が黙っていると、気が変になりそうだよ！」

一座の皆が頷いた。

一人の大学院生の叫びで、場は、一挙に固まった空気が弾けて、皆、口々に「誰も何も言わないって、すごく緊張する」「誰か、何か言ってくれないかと思っても、自分自身何もう言葉が見つからない」等、いっぺんに部屋中に言葉が飛びかった。そして、皆、緊張から解放された、くつろいだ、生き生きした表情になっていた。

ひとしきり、沈黙が続くと緊張するという話題で弾み、打ち溶け合い、場が賑わうと、やがて、静かな沈黙が、また、訪れた。

その時だった。

「沈黙って、いいものですなあ！」という声が、輪の外から聞こえてきた。皆驚いて声のした方を振り返った。

例の老人だった。

「私は、毎日、一日中、独りで飽きるほど沈黙しています。しかし、皆が集まって沈黙するという経験はあまり有りません。皆一緒に沈黙するというのは、実にいい体験でした。ありがとうございます」
そう言い終わると、いっそう呆気にとられている皆を尻目に、するするっと前ににじり出てきて、私の正面にビタリと座った。

「先生にお訊ねしたいことがあります」
と、私の顔をまっすぐに見た。

「ハイ」と私が答えると、

「この質問は、これまで、高名な学者や思想家や教育者に会う度に訊ねてきましたが、一度も満足できる回答を得られなかった。カウンセラーという人に会うのは初めてです。そこでお訊ねしたい」
試されているな、と感じた。

「ある青年から、あなたは何の為に生きるのですか、と訊かれたら、どう答えますか？」

私は、すぐに答えた。

「私は、何かの為に生きているではありません。気がついたら、私はいつのまにか生まれ、生きて

いるのです。

これまで、私は、心の底の方から自然に湧いてくる、こうしたい、こうしようという意思のままに生きてきました。これからも、そうして生きていくでしょう」

老人は黙って頷いた。それから、

「まず、そんなところでしょうな」と呟いた。

この問答が終わると、皆がいつせいに老人に質問をぶつけていった。人生観、生き方、教育に関する質問だった。老人は、いちいち、丁寧に答えていた。

「子どもには、どんなおやつをあげたらいいでしょう？」（この時代、食と健康に関する情報はほとんどなかった）

と問うた女性に対して、

「白米が常食でなかった昔、禅の修行者は少量の玄米を口に入れると一旦箸を置き、両手を膝の上に置いて百三十回黙々と噛み、噛み終えると再び箸を取って又百三十回黙々と噛み続ける。こうして一椀を食べ終える。食べることも修業の一つだったのです。

噛む時は噛むことに集中する。又たくさんの回数しっかり噛むことで脳を刺激する。経験的に、それが体にも頭にも良いことを知っていたのでしょう。

お子さんのおやつも、固いものが良いと思います。歯が生え揃ったら炒り豆とか干し昆布、煮干しなどが良いと思います。固いものを根気よく噛み続けることで、忍耐力や困難に負けない心が育ち、脳を刺激することで頭の発育にも良いのではないのでしょうか。

アイスクリームやカステラのような柔らかいものは、歯が生え揃わない幼い時や歯が抜けた老人に良い食べ物でしょう。(この時代、歯が抜けるとすぐ入れ歯を造るという習慣は、まだ庶民には広がっておらず、歯が抜けたままの年寄りも珍しくなかった) 子供や青年期壮年期の人は、固いものをしっかり噛んで食べるのが良いと思います」

又、どんな本を読んだらいいかという質問には、

「良い本というのは読む人によって違います。万人に良い本というのはありません。

すらすら読めて、良く分かったという本はあまり良い本とは言えません。すらすら読めて良く分かるというのは、読む人のレベルと同程度か、少し下ということ。こういう本は、読む人のレベルを上げるにはあまり役に立ちません。

かと言って、難しすぎて何が書いてあるか分からないという本も、たとえばカントの「純粹理性批判」や西田幾太郎の「善の研究」などは世界的名著と言われていますが、一般的にはお薦めできません。

ただ、百回でも、千回でも、万回でも読み返して、なんとしてでも分かるとういう根性のある人には

良い本です。まあ、そういう人は少ないから、一般論としては、分かれるところと分らないところが入り混じっている本が良いと言えるでしょう。分からないから読み返す、考える。そうすることで読む人のレベルが上がっていきます」

こうして、最後のセッションが終わった。

事務局に終了を告げに行くと、事務局の方から「先生のグループに、いっふう変わった老人が居るでしょう。あの老人の経歴を知っていますか？」と話題にした。

聞いていないと答えると「あの人は一橋大を出て某社に入り、最後は社長を務めて退職したそうです。また、若い頃から禅を研究し、自宅に禅室を建てて毎日坐禅をしているということです。うちの理事長の知り合いのようです」

部屋に戻り、帰宅の支度をしていると、老人が入ってきた。一冊の本を出し「あなたなら解ってくださるかもしれないと思って」と言った。

私は、老人の前に静座し、一礼してから本を手を取った。

「道元禅入門」とあり、著者名が田里亦無たざとやくむとなっている。そして、亦無の註のように、「学歴なし、

職歴なし、禅歴も亦またなし」と記してある。

「あなたは、大学を出られ、社長も務められ、禅の研究も四十年以上と、今しがた事務局の人から聞いたばかりですが、ここに全部無しとあるのは、どうしてでしょう？」と私は訊ねた。

「ああ、それはね」と老人は、

「確かに学校へも行きました。会社にも行きました。禅も興味を持ってやってきました。

しかし、本当のことは、学校でも会社でも禅でも、まだ何ひとつも学んでいません。だから無いのと同じなのです」

私は、さっそく、この本を読んだ。

四十数年経った今も、この本にあった、道元禅師の言葉という

「自己をはこびて方法を修証しゅうしょうするを迷とす、

方法すすみて自己を修証しゅうしょうするはさとりなり」

「身心脱落、脱落身心」

が、心に残っている。

私が教育相談室を退職し、東京でカウンセリングを始めた頃、一人の脳波研究者と知り合った。

彼は、カウンセリング中のクライアントの脳波を採りたいと言った。私は、当時カウンセリングに来ていたクライアントに訊いたが、誰もいいと言わなかった。

そこで、カウンセリング中の私の脳波を測定してどうか、と持ちかけてみた。カウンセリング中、私とクライアントの脳波は、多くの時間、たぶん同じだろうと思ったからだ。

私は頭に電極を付けてカウンセリングをした。測定員は別室にいた。

終わって「シータ波でした」と測定員が驚いて言った。アルファ波と予測していたという。

シータ波は、居眠り中や夢を見ている時、座禅三昧の状態の時などに出る脳波だと言った。言われてみると、カウンセリング中、私が感じているのは自身の内側だけで、体の感覚は無かった。終わると身心ともにリラックスし、とても心地良かった。

「身心脱落、脱落身心」とは、脳波がシータ波の時の状態だと思った。スポーツなどで言う「無になる」も、バットを振る一瞬、シュートする一瞬、脳波がシータ波の状態を指しているのだろう。無というのは、一つでもあり、すべてでもある。結果などは念頭になく、ただ「打つ」だけになっている。こういう時「方法おのず自から来たる」のではないだろうか。

「退屈すると酒を呑みに行く」と老人は言った。

老人が退屈する話し合いとはベータ波レベルの話し合いの時だったと思う。

沈黙が続き、やがて破れて皆が一斉に話し出した時、座はベータ波よりもっと自然の状態の、どんな脳波かは分からないが、老人にとって、初めてグループに加わる気持ちが動くレベルになったと考えられる。

嵩たかキモノ吾ひらヲ啓ケヨ

「それまで天然色で見えていた世界が一瞬に白黒でしか見えなくなった」

高校三年の男子が、その後学校へは行かず、大学受験も諦めて、東京の電器店に勤めるようになった事例を、冒頭に紹介した。

この人が東京に出てから十年も過ぎた頃、私の所に手紙が届いた。

「東京に出てからも、谷有り山有りの険しい道を歩みつつ、それでもなんとか踏み留まって今日まで来られたのは、あの深夜の訪問から始まったカウンセリングのお蔭と感謝しつつ、なお、これからの人生に向かうに当たって」という意味の前置きの後、次の詩のような言葉で結んでいた。

崇^{たか}キモノ

吾^{わが}ヲ啓^{ひら}ケヨ

淨^{きよ}キモノ

吾^{わが}ヲ濯^{そそ}ゲヨ

美^{うら}シキモノ

吾^{わが}ヲ富^とマシメヨ

完

あとがき

この原稿の出版に尽力してくれている甥・芳賀耕一が、私の「まえがき」の芭蕉についての記述に誤りがあるのでないかと、芭蕉の「野ざらし紀行」についての資料を送ってくれた。

また、俳句をやっている妹・睦子も「野ざらし紀行」を持ってきた。

富士川のほとりを行に、三つ計なる捨子の哀げに泣有。この川の早瀬にかけて、うき世の波をし
のぐにたえず、露計の命を待まと捨置けむ。小萩がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすやしほ
れんと、袂より喰物なげてとをるに、

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝、ちゝに憎まれたる歟、母にうとまれたるか。ちゝ、ハ汝を悪にくむにあらじ、母は汝
をうとむにあらじ。唯これ天にして、汝が性のつたなきをなけ。

これを見ると、芭蕉の「汝の性^{さが}」とは、「定め」とか「天命」とかいう言葉に置き換えられそうである。

だが、私が聞いた話は、ここに掲げた資料とは違っていた。私は「まえがき」に書いた通り聞き、「己の本性^{さが}」になることに開眼したのだった。

当時、私は二十代前半で、一応中学校教師にはなったものの、職業も含めて、一生をかけて志す目標が見当たらず、目の前に霧がかかっているような感じがしていた。「汝の本性^{さが}になれ」の一言で、目の前の霧がさっと晴れた思いがした。

この時私が受けとめた「サガ」という発音から、単に与えられた運命というだけではなく、それも含めた、私自身に内在、あるいは潜在するすべての資質、願望を生かしきることを志そうと思った。そう思って、大学では学べなかったことを学ぼうと上京した。

昭和二十四年（一九四九年）、私が大学に進学する時、文類、理類、医類、水産類のどれかを選ぶことになっていた。私は文類を選んだ。

最初の一年半は教養課程で、心理学もあったが、ネズミの実験の話ばかりで面白くなかった。私は二年目の半ばに選ぶ専攻科目を決めかねていた。

私が漠然と心に抱いていたのは人の心、大国の興亡の原因、そして「真理」などだったが、ずばり、私の望みをかなえてくれる学科は見つからず、大学で私が得たものは中学高校教師の資格だけだった。教師になると、夏冬の生徒の休みの間、主に東京を中心に著名な学者、芸術家などを訪ね歩き、教えるを乞うた。予約なしの無名の若者の突然の訪問にもかかわらず、皆会ってくれ、一時間も時間を割いてくれた。貧しかったが良い時代だった。

「汝の本性まがになれ」と聞いたのは、この間だった。以前から漠然と探し求めてきたものが、この一言で集約された。それから私は、心の赴くままに読みたい本を読み、学びたいものを何でも学んだ。

本気で何かを学びたい者にとって、学校は所詮入り口に過ぎない。学校を出てからが本当の学びになる。大学の専攻学科などという制約に邪魔されず、思う存分自由に学びたいものを学べるのである。しかも、生きている限り。

私が到達した「己の本性まがになる」という考えは、

- 一、全身心を十分に働かせて、細胞のひとつひとつを活性化し、全身心の機能を高めること。
- 二、自身の内側に眼を向け、内側が何を望み、何をめざそうとしているかを自得し、全力でその方向に向かうこと。

に集約できる。

人は、内部に独自の羅針盤を持っている。その羅針盤を見つけ、その針が示す方向に歩み出せばよい。このことに年令の制約はない。たとえ高齢者であっても、充実した余生を送りたいと羅針盤の針が示していれば、情報を集め、身心をできる限り健やかにし、心の赴く方に歩み出せばよい。

私も、八十四歳の時にこの稿を起こそうと思い立ち、さっそく取りかかったが、途中、脑梗塞まがいで倒れ、手足のけいれんで中断した。自己流のリハビリで何とか字が書けるところまで回復し、原稿書きを再開したものの、白内障が進行してきて、一日に一枚程度しか書けない日々が続いた。それでも三年がかりで二百数十枚を書き上げることができた。

この原稿を起こそうと思いついたのは、何かの本で読んだシモーヌ・ヴェイユという人の「与えるというものではないが、人には是非渡しておかねばならぬ大切な預りものが、自分の内にある」という言葉を思い出したからである。

私も、生まれてこのかた、多くの人々から大切なものを預かってきた。この、私のうちにある大切な預かりものを、生きていくうちに人々に渡しておきたいと思ったからだった。

この間、テレビの健康番組を見続け、私に良さそうなことはすぐに行い、私の健康状態を改善するの

に役立ちそうな食材やサプリメントを積極的にとり、ほぼ自力で生活できるまでに回復することができた。白内障は手術に頼ることにしたが。

この経験から、健康寿命も、心がけ次第で相当延ばせるのではないかと思うようになった。私の内奥の羅針盤は、できるだけ健康を維持して充実した日々を送りたい、と示している。この、人それぞれの羅針盤こそ、その人の本性^まの核である。

この原稿を出版するに当たっては、甥と妹の手を借りた。

はじめは、ただ出版の手続きだけかと思っていたが、参考資料との照合、校正その他いろいろ手を煩わせているうちに、この原稿が、だんだん私独りのものではないと感じてきた。甥や妹も加わっての三人の仕事と思うようになった。

二人に謝意を述べる。

著者略歴

- 一九三〇年 東京に生まれる。経済恐慌始まる。
- 一九三六年 二・二六事件を漠然と知る。
- 一九三七年 小学校入学。この年から日中戦争に突入。軍国主義教育始まる。
- 一九四〇年 少年剣士隊（私設の軍国少年養成クラブ）入隊。軍事教練を受ける。
- 一九四一年 太平洋戦争始まる。軍国主義教育ますます徹底。
- 一九四二年 父（通信省官吏）、陸軍司政官としてボルネオに出征。
- 一九四三年 東京府立第十五中学校入学。
- 一九四四年 山梨県立韮崎中学校に転校。空襲を避ける為の疎開。
- 一九四八年 同校卒業。同時に新制韮崎高等学校三年に進級。
- 一九四九年 北海道大学文類入学。

一九五三年 同校文学部文学科卒業。中国文学専攻。

北海道浜中村立貫人中学校教諭。

一九五六年 北海道新得町立上富村牛中学校教諭。

一九五九年 北海道立清水高等学校教諭。

この年から一九六二年まで、毎夏開かれた北海道教育委員会主催の一週間合宿「カウンセリング講習会」の講師を務める。

一九六四年 茨城県日立市教育委員会指導室指導主事となる。東京オリンピック開かる。

一九六九年 同市教育研究所教育相談担当研究主事。

日本カウンセリングセンターからカウンセラーの資格を得る。

一九八七年 東京で自営のカウンセリングルームを開く。

二〇〇五年 同ルーム閉鎖。現在に至る。

己の本性さがになる

教育相談、カウンセリングの実践を経て

2018年7月25日 第1版

著者 やすえこうたろう 安江昊太郎

発行者 芳賀耕一

発行所 PCサポート芳賀工房

081-0039 北海道上川郡新得町新内西1-125

TEL: 0156-64-6893 / 090-8708-6334

FAX: 050-7500-6839 / 0156-64-6893

E-mail: kouichi.haga@nifty.com

公式HP <http://tomuraushi.com/>

©2018 Kotaro Yasue

表紙デザイン 野田 尚

印刷・製本 泰成印刷株式会社